



cosmic  
repeat  
proverbs

## Cosmic Repeat Proverbs #1

地球という惑星は、とても複雑で奇妙だ。私たちの知る有機的な生命が存在できるハビタブルゾーンに、水という完璧な媒介が過激な流動を繰り返す中で、細胞が生まれ、植物が生まれ、動物が生まれ、人類が生まれ、文明が生まれ、そして今、私はタイプライターで文章を打っている。混沌とした世界から対称性を理解する「機構」が作られたのだから、それを「奇跡」と呼ぶのも無理はない。しかし、本当に・・・奇跡なのだろうか？

46億年前に地球が生まれ、40億年前に生物が生まれ、5億年前から植物や動物は陸上へ進出した。そこからは指数関数的な増加で、700万年前に猿が二足で歩くようになり、150万年前に火を自在に操るようになり、知恵を手に入れた人類は10万年前から劇的な進化を遂げた、が・・・奇妙だ。1万年前に農業へ辿り着いたと云われている。それを基に線を描くと——何故か、歪なグラフになってしまうのだ。

その間は本当に何の発明もなかったのか？ 古来から未確認飛行物体が世界各地で観測されるのは何故？ 月面に着陸したアポロは司令塔との通信を遮断した際に何をした？ コラ半島で行われた地球の地殻深部調査が中止になった本当の理由は？・・・陰謀論に振り回されては、答えは見つからない。今の人類は、変わらず「科学」という最も優れた手段で文明を支えている。

少しだけ話題を変えよう。皆は「カウンタース」をご存じだろうか？ 太陽を公転する地球の軌道上に存在すると仮定された、地球と同様の惑星である。常に太陽の裏側に隠れている存在なので長らく真偽は不明だったが、物理学を発達させた人類は方程式を用いて地球が唯一の惑星であることを証明した。・・・本当に存在しないのか？ 本当に——存在しなかったのか？

今の人類が己を認知する前、太陽系には2つのハビタブル惑星が存在した。

一つは、私たちが暮らす自然に富んだ惑星。月の満ち引きで生命が混ざり合い、多様な共存関係が構築された——古の人類はここを《フォルタグルンドウ》と呼んだ。

一つは、海水と雨雲に包まれた群青の惑星。僅かな陸地に生命が芽生えることはなく、しかし人類が開拓した——そこは《ティロディアクボ》と呼ばれていた。

今の人類が知る由もない、壮大で複雑な歴史が存在する。2つの地球には、科学を扱う人類と魔法を持つ人類が存在した。環境に依存する言語を用いて高度な歴史を語り継ぐことは難しい。しかし、宇宙の様々な事象を共通の言葉で綴ることができる今、私はタイプライターで物語を記すことにした。これは、永久の命で空白の10万年を生き続けた私が発信できる、唯一の警告かもしれない。この歴史は——嘗ての諺にも綴られている。

【真実を知覚しない人類は、同じ歩みと過ちを繰り返す。】

## Cosmic Repeat Proverbs #1

この物語はフィクションです。しかし、それを証明する要素も存在しません。

# Cosmic Repeat Proverbs

## #1

Created by JukeLife

## Cosmic Repeat Proverbs #1



Cosmic Repeat Proverbs #1

P 0 0 1 ~ P 0 0 2

OP. 魔女は科学を知っている

P 0 0 9 ~ P 0 2 1

0 1. 繰り返される悲劇

P 0 2 3 ~ P 0 3 5

0 2. 意思を秘めた賢者

P 0 3 7 ~ P 0 4 9

0 3. 闘争の意味は上書きされる

P 0 5 1 ~ P 0 6 3

0 4. 受け継がれる使命

P 0 6 5 ~ P 0 7 7

0 5. 単調な事象と混沌の世界

P 0 7 9 ~ P 0 9 1

0 6. 歴史を紡いだ遺産

P\*\*\*\* ~ P\*\*\*\*

0 7. 章題未設定

P\*\*\*\* ~ P\*\*\*\*

0 8. 章題未設定

P\*\*\*\* ~ P\*\*\*\*

0 9. 章題未設定

P\*\*\*\* ~ P\*\*\*\*

1 0. 章題未設定

P\*\*\*\* ~ P\*\*\*\*

ED. 章題未設定

## Cosmic Repeat Proverbs #1

「苜蓿苕苕！ 覬芽苕苕郭鑄蘭苕苕苕！」

「t—降 s ———！ 氣—d ——— 私たち—指 z ——— g ——— い！」

青空が見える。陽射に照らされた身体は不思議と生気が漲っており、微風に吹かれた草木の揺らぐ音、そして大人たちの叫喚が飛び交っている。何の言葉なのか理解できず、しかし考える間もなく、全ての音が一瞬にして消え去る。月が映える青空には、赤い液体と赤い彗星が飛び交っている。

その景色が悲しいわけでもなく、なぜか悲しい。そう思うと青空が段々と遠く離れていき、やがて自分が闇の中へ落ちていくことに気が付く。キャンバスに描かれたような四角い青空へ手を伸ばすが状況は変わらず、一方で得体の知れない恐怖が徐々に視界を覆っていく。

元に戻って、その時に戻って——私が——この私が！

「——ア！ リクレア！ ……大丈夫かい？」 「……ママ。」

「……また、あの夢かい？」 「……うん。」

私は今日も覺されていた、何百回も、何千回も繰り返して、そこで非力な自分を感じる夢を。何の感覚も感じられず、何か意味を感じる夢を。

「ほら、朝食ができたよ。着替えて降りてきな。」 「……うん。」

階段を下りる母親を後目に布団を捲り上げ、心地良い紺色の服を体に巻き付け、胸と腰に帯革を締め付け、鏡に映った眠そうな自分の頬を叩き、その青白い髪を結ぶ。

今日も何一つ変わらない一日が始まる。——心の中では何か、刺激を求めている。それは「好奇心」と呼ばれ、それを持った少女は、昨日と何かが異なる一日を探し始める。

01. 繰り返される悲劇

「レア、その卵を入れてくれるかい？」 「はいはい。」

今日は鶏の機嫌が良いらしい。籠から取り出した2個の卵を台所の角で叩き、ママが両手で熱しているフライパンへ、ママの背後から私も、両手で同時に黄身と白身を垂らしていく。

「今日は上手く割れたねえ。」 「へへっ。」 「・・・カルボ！ 食卓で火炎を出さないの！」

「大丈夫だって、制御しているから！」 「そうやって先週も草鞋を黒焦げにしたでしょ！」

右手の人差し指から小さな火炎を出している白髪の馬鹿をルジャカルボという。どうも、兄は思春期の私よりも反抗心が強いらしい。嗚呼、また小声を言いながら火力を強くしている・・・。

「ラマ、デイル。ラマ、デイル。ラマ——」 「聞こえているよ！」 「ラマ、ティン・・・リハ

ブッド！ これやらないと火力が分からなくなるんだよ！」 「仕事場に向かう途中でやればいい

じゃない。」 「忘れるもん！」 「何で忘れるのよ！」 「何か忘れちゃうの！」

母と妹に挟まれる兄は苦し紛れに訴えるが、どうも歩き出すと全てを忘れて他事を考える癖があるらしい。・・・鶏よりも記憶力が低いんじゃないか？

「レアは何か掴めたか？ 魔法。」 「・・・ううん。」 「何なんだろうな、レアの能力は。」

「やっぱり・・・《無能》なのかな。」 「そんな、何か持っているさ。父さんが特殊な人だったから、レアもそれを受け継いだんだよ。」

私は、魔法が使えない。——基本的に魔法は家族の性質を受け継ぎ、大抵は母親の能力を、たまに父親の能力を、そして稀に《無能》として生まれてくる。

全ての呪文が記された書物から似通った呪文を唱えることで自身の能力を探し出すが、私の場合は無関係な呪文を片端から唱えても、何一つ起こらなかった。呪文には文法的な規則性があるため推測して新たな呪文を生み出すことも可能だが、その組み合わせは夜空に浮かぶ星の数よりも多いと云われている。その可用性は・・・まだまだ低い。

「そうねえ・・・もしかしたら私みたいに呪文は必要ないかもねえ。」 「うーん・・・そんな、神童じゃないんだし・・・。」

魔法は、呪文を唱えなくても使えたりする。ママ曰く、頭の中で感覚的に呪文を操作するらしいが・・・それも大抵は魔法を使い続けた熟練の能力者だけであり、それ以外は稀に、才能を持った子供が発揮するぐらいである。

とにかく、15歳の《無能》に課される仕事は存在しない。この町では能力が途絶えることを懸念して《無能》の結婚も推奨せず、代わりに巫女や学者といった頭が必要な職を勧めてくる。しかし、そんな世間の押し付けなど無視！ 兄よりも先にパンと目玉焼きを食べ終えた私は勉強ではなく冒険へ向かうのだ。もちろん、町に貢献するためにも。

「御馳走様。それじゃ、行ってくるね。」 「レア、最近やってきた《海の民》には気を付けなさ

いよ？」「最近って・・・10年以上も前の話じゃん。一度も見たことないし。」

「それが、つい先週に隣町の奴が《海の民》を見たらしい。服装が証言と一致した。」「・・・本当に、悪い人たちのなの？」「・・・。」

この地に《海の民》がやってきたのは、私が生まれて間もないときの話。彼らへ妙な親近感を抱くのも、周辺地域の住人にしては珍しく古典的な魔法が使えず、その代わりに道具へ魔法を付与する民族だったらしい。彼らの起源や言語は今も不明だが、会ってからスポンジのように私たちの言語を習得して、何時しか生活を共にして、気付けば友好が深まっていた・・・とか。

「いいかい？ 厄災っていうのは人間が忘れたときに再び訪れるものだよ。彼らは人の心に入ってから欺くんのだ。・・・どんなに優れた観察力を持っても、その真核までは絶対に辿り着けない。彼らを信じていた・・・貴方たちの父親も・・・。」「・・・。」

パパは戦士だった。ルジャカルボのように体の表面を黒色に硬化させる能力を持つ無敵のパパは、危険が伴う戦士に適任だった。しかし・・・それでも《海の民》が持つ魔法には勝てなかった。放たれた一瞬の攻撃で、多くの兵隊が全滅した。今の私は・・・そんなパパが残した最後の宝物――

「逆に、私たちが《海の民》を見つければいいじゃない！」「あ、コラ！ 待ち・・・どうして父親の教訓を理解してくれないのよ。」「そういう年頃じゃない？ まあ、あの強気な性格は父さんに似たのかもね。」「・・・。」

1 階の会話を気にも留めず、帯革にペンと紙を括り、肩に鞆を掛け、必要な装備を確認したらベランダから麻縄を伝い外へ脱出する。そろそろ、色褪せた指なし手袋を新調をするべきだろうか。

湿気のない淡い青空、燦々と揺らめく太陽、その地に足を下ろし、眠そうな住民を避けて住宅街を南へ駆け抜ける。突き当りで放置された街壁の穴を潜り、再び草原を同じ速度で駆け抜ける。垣根に靠れる牛や羊が挨拶をしたり、納屋の陰で一休みする庭師が手を振ったり。そして辿り着いたのは、開拓されていない小山の麓。森の境界に聳え立つ一枚岩の上には、変わらずパディマティスとマエレが待っていた。

「これで揃ったな。忘れ物はない？」 「うん。」 「大丈夫。」 「——最近は何れ続きで、

運がいいな。」 「この快晴も、誰かの魔法なのかな。」 「そんな魔法は存在しないって、子供で

も分かるぜ？」 「もう、パディは夢がないなあ。」 「存在したら、そいつが王だろうに。」

私は鞆から折り畳まれた紙を取り出し、それを両手で広げる。何処へ行こうか、何処を拡張しようか。そんな予定を—— 私たちが3年間を掛けて作成した地図を、皆で眺めながら考える。

「今日は南西の森で地形の概算でもするか？」 「そうね、昨日は陽が落ちて無理だったけれど、

《三ツ子山》の峠まで一直線に行けば今日こそは、先の洞窟を調査できるかも。」 「そろそろ、野

宿の許可を親に貰わないとなあ。これ以上は日帰りだと、本格的な作製は厳しいでしょ。」 「確かに。」

「俺の親父は門限に厳しいから・・・限界かもしれない。」 「えー。」

パディマティスは方角や水平角度、座標を感覚的に数値化する能力を持っており、彼がいなければ地図を作れないどころか、下手すれば永遠に森林を彷徨うことになる。赤髪と鋭い目付きを持つ彼は私よりも度胸があるも、大抵は調子に乗ることで痛い目を見るのは言うまでもない。

「いや、実はそれ以外にも・・・ここ最近は何れが曖昧になっているんだ。何というか・・・方角

がダブったり曲がったりするんだ。」 「そんな、魔法って衰えるの？」 「最初はそう思っていたんだが、母親も俺と同じスランプに陥っているらしい。」 「・・・つまり？」 「・・・俺が知ってるよ。何か、方角の基準が狂い始めているんだ。逆にマエレは、問題ないか？」

石を握っている彼女は特定の物質を発光させる能力を持っており、特に暗い森林や洞窟では彼女が活躍する。しかし彼女が持つ魔法と臆病な性格の相性は最悪であり、そういう状況では私たちが彼女の背中を押さなければならぬ。ちなみに、2人の魔法は常に解放されており呪文は不要だとか。

「特に異常はないけれど・・・それが本当なら行きたくないよ・・・私なんて方向音痴なんだから・・・」 「しっかりとしてくれ、そろそろ土地勘も身に付いただろうに。」 「大丈夫、先週も町で迷子になった！」 「誇らしい顔をするな。」 「全く、何のための地図なのか・・・。」

一方で《無能》の私は、地図の書記と計算を担当している。勉強は嫌いだが数術は妙に得意らしく、それが唯一無二の能力として役に立っている。この体力や運動神経も、魔法が使えない私が獲得した冒険の賜物だと信じている。肩身が狭い《無能》だろうと——私は挫けない。

「・・・よし、南西の森と洞窟の探索でいいな？」 「OK。」 「・・・うん。」 「太陽が真上に来たら引き返す。行き帰りの途中に例の泉で休憩を挟もう。」 「・・・久しぶりに山羊の群、見るかな。」 「・・・山羊肉、食べたくなってきた。」 「た、食べ物じゃないですよ!？」

私と2人は茂みを掻き分け、斜陽が零れる薄暗い森の中へ入っていく。マエレの拳に握られた鉱石、それが照らす一枚の地図は、何れ何かに役に立つのだろうか。ここに描かれて“いない”世界が私たちの足を動かし、そして、地図が完成したとき——私たちは何を思うのだろうか。





「P。」——こちら、チームC。水源補給箇所に3人の民間人を確認。《エソテルボ》に住む子供と思われる。どうぞ。」『K。』——こちら、仮説本部。了解した、そちらの状況と彼らの行先を定期的に報告してくれ。子供とはいえ、村人が漏れなく「能力」を持っていることを忘れるな。』

「P。」了解。・・・あ、子供たちが小鹿との接触を試みている。」『K。』——もしかして前に俺が

狩ったサンプルは親子か?」『P。』——そうかも・・・心苦しいなあ。」『K。』——まさか、動物の心

を読み取る能力も存在するのか?」『P。』——事前調査の報告だと心理に関する能力は未確認だから、

大丈夫だよ。多分。」『K。』——全く、おっかないぜ。』

子供たちは呑気に水を飲んだり、容器に補充している。周辺に家屋や人工物は存在しないが・・・

何を目的に訪れた? 装備からして狩猟ではなさそうだし・・・探検? 待てよ、彼らが広げている

地図は・・・。

「P。」——こちら、チームC。彼らは地図を広げている。武器の代わりに古典的な道具を所持しており、作製を目的に来たと予想される。どうぞ。」『K。』——こちら、仮説本部。了解した、部隊

は痕跡を残さないよう注意していると思うが、もしも気付いた素振りを見せたら報告を頼む。』

「P。」了解。・・・あ、小鹿に地図の角を齧られている。」『K。』——平和だな。』「P。・・・

この平和が続いてほしいよ。・・・どうして、僕たちは「第3調査隊」として派遣された? この後

に起こる悲劇と一緒に。」『セシ……【無知が幸せを見て、賢者が幸せを築く】ことを忘れるな。今更、現場の俺たちに選択権はねえよ。』「……。」

確かに、これは自分が選んだ道だった。ディスプレイに投影された《フォルタグルンドウ》は一面が緑で溢れており、それは楽園を眺めているようだった。自分は潜在的に楽園を求めていたのか、それとも楽園に似して異なる《ティロディアクボ》の生活から逃げたかったのか、大木の上に座っている今の自分には、どうでもよかった。

ここを取り壊すのではなく、ここを手に入れるのではなく、ここで共生したい。しかし、人類は既に獲得したヒエラルキーを捨てられない。例えば自分が個人として《フォルタグルンドウ》に永住する道を選ぶとも、組織としての利益を優先する集団の意思は変わらない。

そもそも、永住は不可能だと理性が訴える。ここに適応するためのワクチンは消耗品だし、ここが後に“改革”の手段として使われることを知っている。統制が徹底された自国の考えなど定かではないが、入隊して明かされる《フォルタグルンドウ》の実態と、数年前から活動が活発になりつつある科学省と軍事省——そして、目の前に広がる自然、或いは“資源”と呼べるもの。それを知った我々は、原住民との戦いが始まるだろうと容易に察する。

その現実には僕たちではなく《ティロディアクボ》の民が知るべきだろうが、数千年の月日を経て構築された社会は本当に抜目がない。だから、首脳は《ティロディアクボ》で家族が待っている我々を選んだ。それは自分が捨て駒でないことを保証するが、同時に任務の徹底を課している。

一方で《フォルタグルンドウ》の民に危機を知らせる方法もない。当然ながら言語は異なり、会話

の記録が送信される翻訳機で迂闊に話すことはできない。更に、我々は僅かながら彼らと戦争した過去がある。ここは文明が中途半端に発達しているため、我々が宇宙人であること、最も「ハビタブル惑星が2つ存在すること」を彼らは知らないが、もしも何か条件が違っていたら、今日までの猶予はなかったのだろう。・・・それが良いか悪いかは分からないが。

「ペ。」——こちら、チームC。彼らは南西へ向かった。繰り返す、彼らは南西へ向かった。敵対のリスクは低いと考えられる。」『ギ』——こちら、仮説本部。了解した、残りのチームも指示通り

「部外者」を見逃さないよう監視を徹底せよ。』『ギ』——チームA、了解。』『ギ』——チームB、ラジャー。」『・・・』

部外者、か・・・同じ人類なのに、自分は一体、何のために今を生きているのだろうか。家族のため？ 仕事のため？ 新しい樂園を築くため？ 人類の未来を守るなど大層な真似はできないが、自分の他にも世界の平和を願う者は——いるはずなのに。

・・・平和って・・・何だろう。・・・いや・・・何も知らなかったな。



何事もなく洞窟に辿り着き、私たちは中へ足を踏み入れる。暗闇に包まれた空間、不気味なほどに透き通る風、絶えなく続く段差の激しい道。その恐怖とは裏腹に好奇心が、そこに謎があれば気になってしまうのは、子供の本性だろうか。

「ここで大きな分岐点の登場か。——レア、前回の地点から前に104メートル、右に78メートル、下に26メートルだ。」「了解。えーっと・・・36度の地点で・・・ワオ、ユークリッド距離で大体132メートル！分度器はどこだあ？」「・・・もう、今日は諦めない？」「ここまで来たら両方とも調べようぜ。まだ、昼には間に合うさ。」

それにしても、この巨大な洞窟が500年も発見もされていないとは何故に？・・・今まで埋もれていた？私が生まれる前に発生した地震の話は知っているが・・・世界は何とも、不思議だ。

マエレはパディマティスの説得に渋々と従い、更に奥へ足を踏み入れる。・・・改めて考えると、風が吹くのであれば出口が存在することになる。確かに《エソテルボ》の標高は低くないが——風の流れに身を任せている今、この先には何かしらの答えが待っている。

「・・・石ってこんなに綺麗だったけ？」「・・・？」「ほら、壁を見てよ。何か、艶が・・・黒色？」「・・・本当だ。」

僅かに照らされる壁は黒曜石の如く、凍り付いたような内部が無造作に煌めいている。大気 of 砂埃を撥ね回る光は黄金色に閃いて——ここは、妙に空気が重い。気付けば微風すらも消えている。

「・・・何・・・ここは？」「・・・。」「人工物？いや——建物だ。」

穴を通り抜けた先に広がっていたのは、妙に大きい空間だった。そこには角張った巨大な柱が至る所に、両端が地面と天井に埋もれているか、もしくは「過去に聳え立って」いた。過去に門戸が存在した大きな穴、無数に散らばった透明な鉱石、道中に生える独創的なオブジェクト——それらの多くは石化しているが、非常に精密な構造が施されていたと思われる。

「待った・・・これ以上は進めない。」 「・・・急に？」 「ここへ来るまで感覚は問題なく安定していた。でも、今は狂っているというか・・・ノイズが酷いんだ。最近の症状とは別の。」

あれほど積極的だったパディマティスの顔は、酷く青褪めていた。それは感覚というよりも、本能が何かを拒絶している。私もそうだ、目の前の光景は彩もないくせに幻想的で、それが好奇心よりも恐怖に刺激を与えている。対して、マエレは平然として・・・少しは野生の勘を持ってほしい。

「・・・ここが原因なの？ ・・・ここには・・・ここで、何があったの？」 「・・・人が住んでいた場所だろうよ。」 「いや、社会——私たちの町よりも遥かに高度な社会があった。・・・ここは、その残骸だ。」 「・・・。」

道と家、その内外に存在した何かは、今の《エソテルボ》と基本が同じだった。巨大な家と広大な道は、民族や資源の豊かさ、そして馬車の普及率を物語っている。しかし概要が掴めても、この街が廃れた年代や理由は分からない。私たちが立っている場所には・・・想像以上の歴史が眠っている。

「でも、そんなに高度な文明が滅んだ理由は？ 魔法が使える俺たちよりも進んでいるなら、永遠に繁栄できたはずだぜ？」 「・・・。」 「捨てたんじゃない？ ほら、火事とか災害で使い物にならなくなったからよ。」 「・・・だったら、そいつらは今、どこに居るんだ？」 「・・・。」

「とりあえず、今日はここまでにして帰ろう。」 「・・・そろそろ昼だしな。」

今は答えまで辿り着けそうにはない。少なくとも大人の手が必要だった。だからこそ——いつの日か、この遺跡に秘められた歴史を自分で解明したい。

・・・これだ。これが、学者たちの心に宿る“好奇心”の正体だった。そこに入り混じる“恐怖”

は無知が原因だった。彼らは無知という恐怖を克服するため、それが何かの役に立つから勉強をしているのだ。・・・私が嫌っていた勉強は、その本質を知らないだけだった。

「今日の出来事、町長に報告するの？」 「・・・報告したら、間違ひなく俺たちは入れなくなる

だろうな。」 「そう、もう少しだけ調べて・・・フヘヘ。」 「あッ、レアの無謀な計画を立てる

顔だ。」 「ち、違う。あの遺跡が凄すぎて・・・何か、大きい気がするの。」 「お前の興奮する

気持ち、分かるぜ。俺も股間が大きくなッ」 「もう、そういう下品な考えだからパディは結婚相手

の候補がい」 「こ、これは自然的な反応だ、それぐらいに俺の感覚が何かを—— ア、カカッ

「・・・!？」 「何の・・・音だ？」

元の入口に向かい始めて間もないとき、謎の音が空洞に響き渡った。それは振動と一緒に、何か大きな衝撃音だった。地震・・・ならば一刻も早く脱出しなければ。

「急ごう。」 「落ち着け——地震にしては振動が小さすぎないか？」 「・・・外の音だった、

今のは。」 「何が起きた？ ここまで聞こえる轟音なんて・・・」 《海の民》だ。奴らの魔法

は・・・大きな音が出ると。」 「!!」

今朝に聞いた《海の民》が、本当に攻めてきた？ しかし偶然と解釈するには無理がある。あまりに突拍子のない事実——思考が遅延する。どこを攻撃された？ こども攻撃される？ 何時間前

に攻撃が始まった？・・・家族は、無事？

衝動に駆られた足はマエレを抜き、寸前の暗闇を追うように走り続け、気付けば遠くに佇む光を  
目指していた。外へ出たところで世界の眩しさに、正気が戻る。道具と地図が入った鞆を砂利に投げ

捨て、ひたすらに《三ツ子山》へ向かう。今から《エソテルボ》まで戻るには時間が掛かる。せめて今の状況だけでも——何が起きたのかを確認したい。

開けた峠まで辿り着いた刹那、先程よりも小さい轟音が耳に響く。しかし、それは同時に“目撃”した。青空にまで昇る黒い煙と——斑に広がった無数の炎を——

「・・・嗚呼。・・・嘘だ、・・・嘘だ。」

《エソテルボ》の郊外と周辺は、赤色に染まっていた。具体的な様子は定かではないが、炎と共に複数の巨大な杖が地上に突き刺さった現実味のない光景は、故郷を失った涙すらも忘れるほどだった。あれは魔法で作られた？ 地面から生えた？ いや——空から降ってきた？

その視界に、デジャヴを感じた。前にも・・・いや、何百回も、何千回も感じた情景を。

「赤い・・・彗星・・・。」

TIP・・・《フォルタグルンドウ》に住む人々は、今の人類よりも生命力が遥かに高いです。僅かな酸素でも効率的に交換が行え、怪我や病気の治りが速く、また細菌やウイルスに対する高い免疫力を持ちます。厳しい自然環境を乗り越えた人類が獲得した当然の能力だと思いかもしれませんが、これには奥深い理由と歴史があり、その真相は後々に判明します。レアと同じように洞窟の先で散乱した人工物の残骸を目撃したとき、現代に生きる我々は何かを察したはずです。



「なあ、オクデイブ。お前の机に置かれた旧型の《仮想分子検証装置》は何色の文字が表示されるか覚えているか？」 「ハハッ、僕の記憶力を舐めないほうがいいぞ？ 空色だね。」 「ふーん、

だったら「空色」が何か説明できるか？」

「空色？ そりゃ、惑星に降り注ぐ光子が大気中で散乱

するときに波長の短い寒色が――

「それは、自信を持って「空色」と言えるか？」 「うーん、

見たことないからなあ・・・」 「そう！ 不思議に思わないか？ 俺たちが言語を形成する過程で空

の色を「空色」と名付けたのは紛れもない事実だ。しかし、《ティロディアクボ》へ完全に定住した

《新人類》は「空色」を何と説明する？」 「・・・確かに。」 「最も《科学者》や《歴史者》は

根拠まで説明できるが、一般人は目の色だとか光の色だとか「主観的な日常」で例えてしまう。」

「つまり？」

「言語は長期的に情報を保存する媒体として欠陥が多すぎると思うんだ。写真や音

声とは別の「一次的な知識の参考」が必要になる言語・・・少なくとも自然言語で歴史や文化を記述

しても、物理的な「ノイズ」が増えるだけ。空色の「空」だって、恒星が・・・アレ、何だっけ？」

「「太陽」だよ。」 「おう、それだ。そうやって階層的に――

生まれてから一度も青空を見たことのない《新人類》には、太陽という存在が物理的にも心理的にも

遠く感じられる。青空と同様に《フォルタグルンドウ》では身近な概念だったらしく、それが方角

を確認する手段、それが食糧を生産する要素、それが多様な生命にエネルギーを――とにかく、無

数の恩恵を得られる。少なくとも、僕たちは太陽の本質的な価値や活用を知っている。

これは「存在が失われた刹那、直観はその価値を初めて理解する」という諺に通じる。が・・・

価値が理解されないまま、徐々に存在が失われるものを知った今・・・それは諺も同じだと悟った。

02. 意思を秘めた賢者

「スケプトの考えは分かるけれどね、この『流動的』な宇宙に『絶対的』な情報を残すなんて、無理な話だと思わない？ 無機物に刻むよりも、環境の遷移に対応できる『何か』が常に存在しないとイケないのよ。」 「・・・ほう。」

《ペーパー・モニター》の設計図を見詰めるストウシステイが、ふと話題に加わった。持論を話し終えたスケプトはインカムを触りながら、再び思考を巡らせる。

「・・・つまり、昔話や伝説を語り継ぐ人類のような『機構』が重要ってことか？」 「フフウフ、そういうこと。」 「《保存者》が生命を作る必要があるとは、随分と面倒な使命・・・」 「俺たちは

「兵器開発者」だぞ。生命を脅かす奴が生命を案じるなど、精神が持たない。」 「・・・。」

サイロの一言に、皆が自分を見詰め直した。鋼鉄の部屋と無数の電子機器に囲まれた自分たちは、確かに生命を蔑ろにする元凶かもしれない。しかし――

「自分は『武器が自他の運命を平等に扱う』ことを信じているよ。兵器は生命を破壊する道具だけれど・・・それは生命が自身を守る強力な手段でもある。だから、僕たちは《フォルタグルンドウ》の再移住に向けて『危険な動物を駆逐する兵器』を開発している。だろ？」 「・・・。」

「今日の《ティロディアクボ》に住む《新人類》が、世界の理とされた『弱肉強食』を忘れるのは仕方ないさ。」  
「・・・オクディブの言う通りかもな。結局、人類は欲求や本能から逃れられないままかもな。」  
「・・・こんな話題だっけ。」

謎の結論で話題に幕が下り、各々が元の作業に復帰する。が・・・現在は《朝の時間》なので、残業を嫌うスケプトはソファで中途半端な瞑想をしている。彼が担当する『兵器が及ぼす影響の検証と評価』は誰よりも早く片付けられるため、何も文句はないが・・・テーブルに空のコーヒークップやら《情報操作端末機器》やら私物を置いたままにする癖は直りそうにない。

自分のグラスと一緒にスケプトのカップを持ち去ったサイロは、ここ一番の効率家であり何かと口が冷たい。しかし紺色のポニーテールは面倒屋の証拠であり割と皆に氣を使うなど、よく分からない性格を持った『回路の執筆者』である。

自分とストウシステイは同じ『兵器の設計者』に見えるかもしれないが、実際は自分が小型兵器を、彼女が大型兵器を得意としている。こんな自分も大学を卒業した『エリート』に分類されるわけだが、特に紫色の瞳と髪のストゥは科学応用部門の中で最も頭脳成績が良く――

「あら、隣の班のフィードバックが届いている。」  
「あー、そういえば向こうの軍事コロニーが完成したんだっけ、3日前ぐらいに。」  
「もう使われたのか？ 司令部もセツカチだな。」

「でも、どうやら《天の杖》は半分ぐらいが不発だったらしいよ。」  
「やっぱりな！ 多重層のコーティングもしないで低軌道から投下するなんて無謀な話だ！」  
「消耗品だからと資源をケチった末路だな。」  
「ハハハ・・・僕たちの兵器は完璧だと祈るよ・・・。」

これまでの兵器開発1課が考案した兵器は無数に存在するが、今回の《移住計画》では《新人類》が再び《フォルタグルンドウ》での永続的な生活を営めるよう、環境構築の一つとして安全の確保に適した兵器が使用される。僕たちが2年前に開発した《自由飛行型戦闘機・FF》と《超磁力式自動小銃・MRG》も計画の第2部で使われる旨が通達されたので、敵は随分と手強い様子である。

「しかし、こんな強力な武器を開発したのはいいが・・・本当に必要なのか？」 「ハハッ、現地に肉食動物がいるのは承知だろう？ まだまだ《フォルタグルンドウ》は謎に包まれている、そういう場合こそ「備えあれば憂いなし」だと思うよ。」 「動物ねえ・・・あんなに可愛らしい家畜が、本当に人を襲うのかい？ 資料で見た奴らは最早「モンスター」だったぞ。」 「環境が違うから、エンティティーも特性が変わるのよ。安地も安定もない世界では、絶対的な力を持った生命だけが生き残り続けるわけ。」 「はぁ・・・自然っていうのは恐ろしいな。」

実際は単純な話ではないらしく、《移住計画》の概要を聞く限りでは動物や植物に寄生する細菌やウイルスも侮れない敵であり、実際に14年前の第1調査隊が動物の攻撃に遭遇したり想定外のウイルスに感染するなど、まだまだ課題が残っている。《ティロディアクボ》の千年も続く大雨や暴風もそうだが、自然の力は本当に恐ろしい。

「スケプト、そろそろ08時だぞ。コーヒーも淹れてやったから、さっさと腰を上げて《OS》の新鮮なタスクをやりな。」 「あと5分・・・」 「膝に掛けてやろうか？」 「はいはい！ やりますから！」

そんな過酷な《ティロディアクボ》は、そもそも人類が居住する惑星ではなかった。千年前までは

本来の・・・歴史では《前人類》と呼ばれるが、僕たちの祖先は《フォルタグルドゥ》に住んでいた。ことと変わらない生活、それも太陽と青空の下で暮らしていた《前人類》は、制御不能な災害を被ったことで《フォルタグルドゥ》という故郷を捨て、それまで鉱石資源を採掘していた反対側の惑星《ティロディアクボ》まで避難した経緯を持つ。

「たった今、《FFF》の追加プログラムの最終版が完成したぞ。検証も問題ない。」「・・・は？ あれ、完成版として提出しちゃったよ！？」「はあ！？ パッケージに何のラベルも貼って

なかっただろ！？」「この前まで“無印が完成品な”と言ったじゃない！」「それは検証用のデータの話で——」「へい、2人とも落ち着け・・・とりあえず行動が先だ。」

ここへ避難したのは約500名。人類の再始動を掲げて“5人の賢者”が開拓の先導を行い、段々と《ティロディアクボ》に地下都市という蟻の巣が繁栄した。生活循環が安定した最近に第1調査隊が宇宙船で《フォルタグルドゥ》へ派遣されるが、故郷を生き延びた《前人類》の存在は確認されなかった。対して人体への影響が懸念されていた汚染は治まっており、第2調査隊の帰還後に《フォルタグルドゥ》が居住可能であると断定された。

「《FFF》とか2日前に量産開始の通告が来たのよ！？」「今から仕様の変更なんて許されるのか？」「なあ、何か俺が悪いみたいな空気になってねえか！？ 基幹のシステムじゃなければ、プログラムは外部から上書き・・・そもそも《FFF》の設計者はストゥだろ？」「そう、そこに改竄防止用の《オーバー・セキュリティ》まで組み込んで・・・」「そうだった！ あれ100機ぐらい作るんだろ！？」「損傷時の負担軽減に関するプログラムがないのは、マズいぞ。」

特に千年前の災害に関する歴史は凡そが消失しているので何も言えないが、これだけ発達した科学を持つ人類が太刀打ちできなかった災害とは、一体何だったのか？ 一説には原子力を用いた兵器で大規模な戦争が勃発した過去を政府が隠蔽している話を云われたりするが、何にせよ明白な根拠が存在せず、とにかく《フォルタグルンドウ》の情報は今日でも殆どが公開されていない。

「なあ、本番で運用しないと正確なプログラムを書けない態で、今回は見送らないか？」 「それ俺の前で言うか？」 「正直にミスを伝えましょうよ。多少の評価は下がるけれど・・・フフフ、この際に《オーバー・セキュリティ》の実態——見たくない？」 「・・・！ 整合性の点検も必要だと言えば現地で」「待て待て、待て。何を目的に！？」 「知的好奇心。」 「ハア！？」

陰謀論は良からぬ考えだが、時には娯楽として、時には本能として考える節がある。例えば調査隊も僕たちと同様に情報の一切を口外してはならないが、注目するべき点は調査隊の平均年齢である。科学応用部門は若者から老人まで幅広い年齢層より構成されているが、一方で調査隊だけは家族持ちのオッサンばかりである。それなりのリスクを含む役職に——扶養者を採用するものか？

「大丈夫、見るだけよ。」 「ストウが言う『大丈夫』は信用できねえんだよ。」 「分かった、多数決でいい。今は2対1、オクディブの意見次第で現地に足を運ぶか決めるんだ。」 「サイロ、お前そんなキャラだっけ！？ ・・・分かったよ。・・・オクディブ、お前はどうか？」

これも社会的な方針だと言われてしまえば文句は出ないが、社会の因果や相関が複雑すぎる現在の統制を“5人の賢者”は把握しているのだろうか？ 何が無造作で、何が必然的か。時々・・・自分という役割が生み出す意義や本質が、分からなくなる。兵器の開発が何を——

「オクデイブ? . . . . .ヘイ!」 「!? . . . . .な、何だ?」 「. . . . .考え事か?」

「. . . . .いや、少しだけ危険な妄想をされていて. . . . .」 「良い考えだと思うか?」 「. . . . .悪くはないと. . . . .思う?」 「ほら、これで3対1よ。」 「嗚呼. . . . .お前は、まだ若いんだな。」

「うん. . . . .え、何の話?」 「いいさ、若者の心には負けたよ。」 「スケプト含めて全員20代だろ。」 「現地で《オーバー・セキュリティ》の仕組みを見学するぞ。」

「. . . . .は?」



1課の研究室を施錠した後、僕たちは必要な機材を持ち製作所へ向かった。確かに追加パッケージを正常にインストールする必要があるが、その為に全員が現場へ出向くのは不自然な気もするが。

科学応用部門の拠点は分散しており、特に地上での試験や運用が強いられる製作所と電子情報の徹底的な保護が強いられる研究所は場所も高度も遠く離れている。

「向こうも両者の部長に黙ってくれるのは有り難い話だけれどさ. . . . .その『工房3F17』って何処だよ!?」 第〇製作所とか単純な名前だったはずだぞ!」 「自分が配属したときから、そんな名称だったよ。」 「スケプトは理論工学が担当だからな. . . . .《移住計画》の経過に伴って担当

が細分化されたんだよ。」 「そうそう、世界は広いの。」

いつものように退屈な灰色の廊下で白衣を纏った関係者と擦れ違いながら、複雑な迷路を潜り抜け

た先で少しは彩がある広間の《通行搬送帯道》に一時だけ足を休ませ、10分後に第3ターミナルへ到着すれば色彩の豊かな草原で寛ぐ人々、または行き交う人々を通り抜けて《高速列車》まで歩みを続ける。あの、螺旋のエレベーションが有名な《線》である。

ここ最近「磁場の逆転」が発生しているせいか地上付近の都市や施設が閉鎖される日も多く、故に深層部の名所である楽園と植物の憩いを求めて観光人が増加している。既に《空間恐怖症》という単語は死語になりつつあるが、それでも人間が無機質な空間に留まるのは難しいようだ。

「こんな《科学者》ばかりの巢窟よりも、第2ターミナルにある牧場のほうが広くて休めるだろうに。」「そう考える奴が大量にいるから、第3ターミナルなら空いていると思う奴も現れるんだよ。集団心理ってやつだ。」「ハハハ、何処も『人は人を見て動く』からね。」

「・・・もしかして、今のは諺？」「お、正解。・・・って、まさか。」「クソ、またストウに先を越された。」「はあ、まだ下らない賭け事は続いていたのか。」「いいいいいよ。自分も、何だか諺に思考が縛られているような気がして・・・無意識だから、指摘して。」

「諺か・・・そこまでとは、宗教の道具みたいだな。」「まさか、今の宗教は《奇想の仮想》に過ぎないだろ？ 古典的な宗教は例外なく消えている。」「『信仰』やら『崇拜』やらがなくとも集団的な暗示は宗教の一つだ。ミームは面白いが、恐ろしいぞ。」「いいじゃない、自由だし。」

「・・・まあ、個人の勝手かもな。」

サイロが指摘するように、自分も諺に暗示を受けているのかもしれない。それは先代が大切だと判断して圧縮した知恵であろうと、言葉という時間や空間を超える存在は、同時に「古く悪い」考えを



伝搬しているかもしれない。《フォルタグルンドウ》へ辿り着いた《新人類》は“その遺伝”を断ち切るために言語を再構築したというのに、果たして効果はあったのか・・・。

人間は根拠や意義を持ちたがる。それは文化や学問として世界を良い方向へ運ぶが、それは同時に存在しない“真実”やら“神様”やらを創造する、いや、実際は分らない。現に、僕たちは進化の過程を経て生存した“だけ”なのか、初めから意図的に存在している“だけ”なのか、今まで証明されていない。しかし・・・皮肉にも、存在しない“それら”は《フラクタル》のように自分で自分の根拠として仮定している。時間や空間を辿るのだから、証明が・・・意味が――

「ねえ、スケプト。朝方で理想の言語について熱弁してもらったけれど、今の言語が作られたときは――何を・・・いや、昔の言語から・・・いや。ごめん、何でもないや。」「お、おう？」

そうだ、言語も同様に長い年月を経て遷移するものであり、そこに極端な歴史を保持できるわけではない。最も、千年前の歴史を知ったところで得られるものはない。

「・・・何だよ、気になるじゃねえか。」「ごめんよ、途中で矛盾に気付いたからさ。」「何

だか、今日のオクディブは落ち着かないわね。」「自分も何だか。」「・・・。」

作為性という莫大な概念に不安を抱いていた、それだけだった。こうして、無鉄砲に根拠や意義を探し求めてしまう自分も・・・まだまだ未熟なのだろう。



「それにしても、1課の人間が製造現場に来るとは珍しいな。」 「ハハハ・・・完璧を目指しているつもりですが、僕たちも人間ですから。別に、どれだけ現物を見ても——浪漫が感じられるので、良いですよ。」 「そりゃぁ嬉しいね、俺たちも誇りに思える。」

サイロとストウが脚立の上でシステムの更新を行い、その手前で自分は工房3F17の所長と雑談する一方、スケプトは《FFF》の周囲を歩き回りながら目を開けたり閉じたりしている。違法に外部の技術を盗み取る様子が勘付かれないよう、自分は所長を引き留める役目を担っているわけだが、こうして傍観すると・・・やはり、全員が変人だと思い改める。

「それにしても、1機ずつ更新するのは大変そうだな。」 「仕方ないですよ、どっかの誰かさんがテキトーなメモで 「聞こえているぞ。」 「まあまあ。別に、手順書とデータさえ渡してくれても黙って・・・」 「特殊な機体なのでシステムが複雑なんですよ。」 「ああ、そうだよ・・・俺も最初は驚いたよ。こんな兵器・・・いや、移動手段は初めて見た。」

確かに、飛行機といえば翼と出力装置が付いた機体を想像するが——この、パラボラアンテナを組み合わせたような巨大な円盤は桁違いの性能を秘めている。複雑な繋ぎ目をした鋼色の表面は全身が空気を斬る翼であり、その下部にはタービンも噴射機構もない3個の不思議なスラスタ、そして自分が設計した《MRG》が露出している。

《FFF》は、学生時代のストウが1課に配属される前から設計していたものだ。フリスビーを基にした飛行機は既に考案されていたが、彼女は従来の翼や出力装置を取っ払ったうえにスラスタの技術を独学で開発してしまった。宇宙に存在する4つの力を上手く弄ることで自由に浮遊させられる

というが、彼女の論文を読んだところで誰も理解できず、発表会で試作品を飛ばしたら速攻で軍事省に攫われたという伝説が残っている。

「終わったぞ。次、行くぞ。」 「オクディブ、あと何機ぐらいよ？」 「えーっと・・・23機

だね。」 「そんなに！？ やったあ！」 「ええっ・・・社畜なのか彼Z」 「オッサン、解除して

くれ。」 「はいはい・・・。」

どうやら、まだ《オーバー・セキュリティ》を納得できるまで解読できていないらしい・・・

嗚呼、スケプトが直立したまま死んでいる。全く・・・もう。

「おい、行くぞ。」 「——。」 「・・・こりゃ、駄目だな。」 「オクディブさんも大変

ですなあ・・・。」 「ハハハ・・・慣れっこですよ。」

なぜ、ストウは18歳から働いているのか。なぜ、1課は若者ばかりなのか。なぜ、兵器開発は1課だけなのか。なぜ、1課が軍事省ではなく科学省の下に配属しているのか。その答えは彼女が軍という存在を嫌っていたから。——そもそも《FF》は戦闘用ではなく、純粹に飛行機として設計されていた。しかし圧倒的な技術を目の当たりにした軍事省は、彼女と複雑な取引を交わした。

人員と環境を用意する代わりに、それは兵器として開発する。そこに拒否権など存在しない。決意したストウはスケプトの長考する癖を買い、サイロの完璧な腕を買い、自分の・・・。自分は、なぜ選ばれたのだろうか？ 選抜のとき、隣に立っていた幼馴染のパラモは僕より成績も志向も優れていた。何より、自分は「理由もなく銃火器を作るため」に軍事省へ就職した。面接と同じように武器の浪漫を語ったはずなのに、武器を嫌う彼女は何故、武器が好きな自分を引き入れた？

「次だ次だ。」 「・・・面倒なら私に《オーバー・セキュリティ》の鍵を渡してもいいんですよ？」 「そうしたいところだけれどねえ、不正な改竄を防止するために責任者が首から下げているわけで・・・ 「見張っていれば大丈夫ですって。」 「いやほら、鍵がスキャンニングされる可能性もリスクに含まれるから——」 「・・・。」 「き、君を疑っているわけじゃないよ。」

ストゥは兵器を好む人間ではないが・・・意味もなく危険な道を歩く程度には、厄介な性格をしている。どうして・・・自分は、彼女と同じように「兵器を嫌いにならなかった」のだろうか？



パッケージの更新と《オーバー・セキュリティ》の解説は無事に終わり、4人は第1ターミナルの店舗で昼食を摂っている。しかし3人の白熱した会議は止まらず、食い荒らした皿を囲み1時間が経過した。・・・眠い。

「——そう、公開鍵とパッケージの狼藉が復号鍵として使用されているの。処理を通過したプログラムとコンパイラーが同じRAMの中でシステムに対応したプログラムを交換するから、狼藉の値が不要なコンパイラーを送信される前に暗号化されていない改竄したパッケージをRAMに直接ぶち込めなければ、不正はできないわけ。」 「起動回数も鍵に使われているなら絶対に不可能じゃないか。お手上げッ！ これ以上の質問なしッ！」

相変わらず何を言っているのか、3割も理解できない。・・・しかし、ここまで《オーバー・セ

キユリティー》の解説に執着しているのは脆弱性を突きたいわけではなく、正式な《科学者》にさえ公開されていない技術や知識が多く潜むからである。人は何かを隠されると、それを探してしまう。

「よくまあ、本体のソースもログも頼らずに仕組みを解明できたよね……」 「フン、あれだけ時間があれば即席でテスト用のパッケージが試し放題だぞ。」 「なるほど……。」

《ティロディアアクボ》の歴史や社会、学問にも、少なからず秘密はある。明示的に情報が隠されることもあれば、存在すら気付くことのない情報も存在する。……それは、悪いことではない。不正や悪用を防ぐためとか、健全な思考を育てるためとか、都合に対する意図が——

『アー。聞こえるか?』 「!?」 『ギギギ——おう、ばっちり翻訳されているぞ。』 『ギギギ——アホ

か、俺たちが知らない言語だぞ。』 『向こうに行けば、使い道も分かるだろ。』 『ギギギ——』

突如、謎の会話がインカムを通じて右耳に垂れ流される。何処かのグループに混線したか、設定を間違えているようだ。話を聞く限りはリアルタイムの……翻訳機……?」

「どうした?」 「……あ、大丈夫。インカムが混線してさ。」 「そういえば、ここは軍人が

ウヨウヨいる場所だったな。」 「一応だが、盗聴は違法だぞ?」 「ま、まさか軍事省の機密情報を探ろうとか思っていないじゃない!」 「図星じゃねえか。」 「……。」

物事の「意義」は幻想だろうと、そこに「意図」は必ず存在する。今の会話が演技でなければ、謎の言語を翻訳する機械は存在する。しかし《ティロディアアクボ》に存在するのは、一つの人工言語と幾つかのコンピューター言語のみ。……謎の言語とは? ……何のために、何を翻訳する?

TIP・・・本作で描かれる文章や単位は、現地で使われている言語を基に日本語へ翻訳したものです。《フォルタグルンドウ》に存在するパンは現代の私たちが知るパンとは異なりますし、対して科学が発達している《ティロディアクボ》では未知の事象を現代の文明が理解できるよう造語で表記してあります。魔法の呪文は前世の人類で途絶えた言語、そして今世の人類が蘇らせた言語であり、それと似通った過程と持つ古風なヘブライ語を代用しています。言語とは遷移する歴史が圧縮された情報の塊であり、それを扱うのは本来、とても難しいことなのです。

久しく姿を現した《海の民》は、14年前と同じように《エソテルボ》へ攻撃を仕掛けた。事態は一刻を争う——今の私には何ができる？ 何をするべき？ 夢と同じ景色に……嗚呼、嫌だ。何もできずに藻掻くだけの自分を認めたくない。

負傷者数、死亡者数は不明。町が“消滅的な打撃”を受けていなければ、今頃……いや、今はマエレとパディマティスに合流するのだ。2人は《出力型》の戦士でもなければ、自分の武器は小さなナイフのみ。——私たちは、無力だ。

「……マエレー！……パディー！」 「……。」

無我夢中に走り続けたせいで、私も2人も互いに見失ってしまった。ここから町まで……いや、隣町のほうが近いから——駄目だ、洞窟で感じた振動は地上よりも大きかったのだから、向こうも被害を受けている。東に見える黒煙が、その現状を物語っている。

「——レあ！」 「！」

後方から、微かにマエレの声が聞こえた。しかし——そこには2人ではなく、4人の影が佇んでいる。機能的な“ヘルメット”を被り、植物と同化した模様の“スーツ”を纏い、巷で“銃”と呼ばれている遠距離武器を友人の頭に突き付ける2人の男は……《海の民》そのものであった。

「……ふ、2人を放せ！」 『隼鞠蒔——無理な話だ。君も大人しく従ってもらおうか。』

彼らが持つ攻撃手段は明確ではないが、私の体力や筋力だけでは勝てるはずもなく、言葉の通りに降参する他ない。彼が口から放つ言葉は私たちの知らない言語で——それは間もなく、私たちの言語に翻訳される。その無機質な口調に、恐怖と……僅かに、妙な感動を覚えている。

03. 闘争の意味は上書きされる

「……」 「費距長途詎蒼？」 「……」 「韞觶英芽。」

投げ捨てた鞆を受け取った私は、銃を突き付けられながら歩み続けた。手足を拘束もせず、無力な私たちを明らかな態度で見下している。彼らは何を目的に私たちを——いや、何処へ向かってい

る？ ひとまず、今の状況を打開しなければ。彼らを観察すれば、何か分かるかもしれない。ヘルメットは頭部への攻撃を防ぐだけではなく、様々な機能が付いている。半透明の板は目を保護するために、先程の翻訳された声は横側に空いた穴から聞こえた気がする。しかし、今は彼らの言葉しか聞こえない。——彼らは、誰に向かって話している？

前を歩くマエレから、噁り泣く声が聞こえる。その背中に——嗚呼、今は考えたくない。怒り、憎しみ、悲しみ、その複雑な感情に吞まれないよう……失われた日常など……。

ママは、無事に逃げた？ ルジャカルボは、馬鹿をして……今、家族は……。

『葦酖苧——お前ら、泣くんじゃない。』 「う、……五月蠅い。」 『讚仁苧——泣いていい。今しか、泣くことはできない。』 「……」

「お前たちが《エソテルボ》に火を付けたんだな？」 『蜀苕鞠——その主語は間違っているが、



そうだ。俺たちの社会が侵略を始めた。』 「何故だ！ 何が欲<sup>ズ</sup> <sup>ミ</sup> 茂<sup>ミ</sup> 芒<sup>ミ</sup>、—— おい、お前

も感傷的に答えるな。』 『闊<sup>ミ</sup> 芩<sup>ミ</sup> 苳<sup>ミ</sup>—— 分かった。』

パディマティスは理不尽に頭を殴られ、再び静寂が訪れる。草を踏み締める音の一つ々々が、自分の心に這い回る歪な傷を明瞭にしてい<sup>ク</sup>。殺されるのか？ 犯されるのか？ いや、その場で行えば済む話だ。それなら——

『鏝銅英—— 到着した。』 「・・・何処だ？」 『覽<sup>ミ</sup> 輩<sup>ミ</sup> 苳<sup>ミ</sup>—— 何処でもない。村人も、仮説

本部の奴らも、誰も来ない森の奥さ！』 「ッ！ おい、離<sup>ミ</sup> スッ！」 「え、n！」

髭を生やした男はパディマティスの髪を掴んでは茂みへ放り投げ、隣のマエレを樹木に押し付けた。もう一人の大柄な男は背後から私の首に腕を巻き、頭に銃を突き付け、その光景を無言で眺めている。

『助<sup>ミ</sup> え<sup>ミ</sup> 』 『莠<sup>ミ</sup> 荷<sup>ミ</sup> 荷<sup>ミ</sup>—— 俺たちは1ヶ月も森に籠っていたんだ、今にも股間が爆発しそうだ。』

男は荒い息で、右手に銃を握ったまま、徐に股間を弄り出した・・・嗚呼、そういうことか、後者が目的だったのか。

「マエレ！」 『花<sup>ミ</sup> 莠<sup>ミ</sup> 輶<sup>ミ</sup>—— この女は俺が貰うぜ！ クソッ、ファスナーが開かねえ——

その時だった。高く鋭い轟音が右耳から左耳へ抜けたと思えば、マエレを犯そうとした男の頭部は一瞬にして破裂した。鮮やかな草木、私の額にまで紅色の飛沫が飛び散り、首から上を失った体は血を湧き出しながら地へ崩れる。その一転する様子を目の当たりにした私は—— 思考ができない。

「・・・う、パディいいい」 『落<sup>ミ</sup> ち<sup>ミ</sup> 着<sup>ミ</sup> け・・・もう、大丈夫・・・。』

マエレはパディマティスに抱き着き、それは悲惨な状況で在りながらも少しだけ安堵した。後ろの

男は仲間を殺した。その意図は分からないが、一時でも猶予を作ってくれた彼は・・・しかし、首に巻き付けた腕を緩めようとはしない。

「・・・どうして、助けた？」 『誨裡仁——勘違いするな。俺は、奴の行為を許せなかった。』

家族を持つ文明人として、野蛮な同族が許せなかった。それだけだ。』

横目に映る男の表情は険しく、心を殺していた。だが、そこには私が持っていた複雑な感情と同じものが滲み出ている。いや、何かを覚悟したような、そんな顔を。

『花仍苧——こちら・・・チームA。水源補給箇所を確認された3人の民間人を始末する。』

「・・・どうやら、逃がしてくれる気はなさそうだな。」 『眠苳芽——言ったはずだ。これは

戦争・・・敵を殲滅する意思は変わらない。そこで齎される死に、俺は最大の敬意を称する——

彼は銃をパディマティスへ向けようとした。それは——彼が最も油断していた瞬間でもあった。

「ウ！」 「拾って！」 「！」

私たちを見縊っていたのが幸いであつた。太腿に隠したナイフを彼の膝裏に刺せば、蹣跚めいた隙に私は腕から抜け出し、パディマティスは死体から銃を引っ張り出した。死体の肩に紐が引っ掛かるも、その銃口を男に向けたまま、姿勢を直した2人は身を固める。・・・私は、男の右腕を乱しても銃まで奪うことはできなかった。

「イテテ・・・。」 「レア！」

『箒扎昌——どうやら、俺を殺せる程度の“魔法”は持っていないようだ。』 「・・・そうだな、でも、そっちの魔法は俺の手に有るぜ？」 「・・・。」

彼らは住民が持つ能力を知ったうえで、あの余裕を？ 今の言い草では、私たちを観察していた。

全員が戦闘に不向きだと見抜いて？ いや、何を知っている？ 私たちを“どこまで”知っている？

『葦醜荏——お前のような少年に、引金が引けるか？ 人間を殺す勇氣はあるか？』 「ああ、

この指の部分？ そうだな。お前は《エソテルポ》を無茶苦茶にした、その理由だけで充分だ。」

「・・・俺の両親を・・・俺の家族を・・・う、返せよ！ おい・・・なあ！」 「・・・」

パディマティスは米粒の涙を頬に垂らしながら、男を憎み続ける。しかし男は、先程と眉の一つも変わらない面で見詰めている。血に塗れた2人の沈黙する姿は、異質だった。

『花苳氏——これが戦争だ。【創造と破壊は一つの変化に過ぎない】。【悲劇に感化された感情が新たな悲劇を生む】。【勝者が敗者の過去を記す】。そう、教えられた。ここで一人の兵士を吹き

飛ばそうが、戦況は変わらず、心に空いた穴は塞がらず、何も得られずに終末を迎える。』

「——いいや、違うな。」 「・・・！」

明後日の方向から聞こえた一言を境に、状況は一変した。取り囲むように近づく複数の戦士。その背後には火災を逃れた多くの住人。そして、赤髪と鋭い目付きをした町長が——姿を現した。

「【万物は情報を秘める】のだから、一人の兵士も生かすべきだろう。お前さんは、敗者が記した歴史を学び忘れたようだな。」 「——親父い！」



「奴」と同じように幾つかの部隊が在るわけだな。その人数も教えろ。」 『麒麟障』—— 仮設

本部には32人の兵士がいる。作戦を立てた後に、そこから5つのチームに分散して行動する。基本的に2人で行動する。』 「その場所はどこ？」 『花花巷』—— ここは『領域C』の13-01だな。

嗚呼、そのまま北へ進めば辿り着く。』 「どうだ？」 「ええ、確かに嘘は言っていない様子ですね。」

「テレパシーの反応も虚無ッ。ていうか『海の民』は能力を持たないんだろ？」 「油断は禁物。息子と同じように感覚で位置と方角を理解しているのだから、この際は『無能』も侮れん。」

肌に着した血を拭き取る私の横では、パディマティスの父親と心理を探索する人間が大柄な男を囲み、慎重に尋問を続けている。彼は立場を弁えているのか、脚の手当に敬意を示しているのか、妙に正直だった。やはり、彼は素手の戦士すらも手強いことを知っている。

・・・前回の奇襲では『想定される敵の行動』が考案も共有もされていないという問題が致命的な敗因に繋がった。こうして皆が町を脱出できたのは、素早く有事を判断して『地下通路』に潜ったが故である。—— ただし、私たちが無事に発見されたのは奇跡的だった。

「全く、ヘルメットに便利な翻訳機が付いていたとは・・・これを捨てた『奴』も賢いですね。」

「そうだな。しかし彼も、相手の頭を吹き飛ばすとは・・・研究に使用せず困ったものだ。」 「話が片付けば済みです。2人を殺めて言語と機構を解析しましょう。」

小岩に座る2人目の『海の民』は、避難場所へ向かう途中に木の上で潜伏していたとか。もう一人の兵士には逃げられてしまったが、今のところは尾行もされていない。

「・・・そう、容易く殺してはならん。」 「何故です！？ そんな危険を 人間だからだ。」

我々と同じ人間だ。・・・彼らにも家族がいる。互いに殺し合えば、互いに怨み合う。・・・復讐が新たな復讐を生み、何れ無と化す。それは「核の連鎖反応」のように・・・何も手に負えなくなる。」 「・・・。」 『禽芭、——全く、その通りだな。』 「ッ、・・・好い気になりやがって。」

何なのか。・・・何かを忘れている。幸い、ママと兄が別の班に合流した話は聞いている。彼らは《ティロディアクボ》という星から、この大地・・・《フォルタグルンドウ》と呼ぶようだが、ここへ来た目的は「仮設本部」の護衛だけと言う。

「皆、聞いてくれ。ここからは彼らの仮設本部を制圧する組と、東の非常拠点へ向かい隣町の民へ情報を共有する組に分かれる。戦士は8・2に、加えて《入力型》の民も能力が役に立ちそうであれば制圧に参加してくれ。」 「私は必要そうね。」 「町長、僕は行くべきですか？」 「そうだな、今回は人間を感じできる民が必須だ。」 「ワシも参戦しよう。」 「爺！ 火吹きのお老人は——

身体や性格と同じように、魔法も親から子へ引き継がれていく。それは強い力を持つ一族が絶対的な支配を続ける理に思えるが、実際は力など時代と共に遷移する一つの要素に過ぎず、結局は突発的に芽生える「芯」が集団を組織する。——パディマティスの父親が見せる背中では、14年前の勇敢に立ち向かった姿と同じなのだろう。それは母が語るものではなく、彼の息子が見せた勇姿と——

「なあ、その厳つい銃を俺に撃ってくれよ。」 「正気か？ 爆発するんだぞ？」 「そう焦るな、俺の硬貨した皮膚は火力を扱う戦士よりも硬いんだぜ？」 「・・・分かったよ。ここから離れた場所です。」 「パディ！ 気を付けてよ？」 「安心しろ、この「厳つい銃」があれば何も

怖くないぜ。」「・・・いつものパディね。」「はああ。勇敢なのか、馬鹿なのか・・・。」

攻撃の具体的な内容は事前に通知されるらしく、それらは真上の青空に浮かぶ「居留地」から、未知の技術によって送られる。隣町に道具や家具を浮遊させられる家系を聞いたことはあるが、まさか土地すらも掌にあるとは、恐ろしい民族である。

攻撃は3部に分かれており、その第一歩として《天の杖》が周囲の町へ投下された。本来は町が跡形もなく消え去る威力であり、これが不発だったのは幸運だと言う。・・・畜生、何が「幸運」だ。次は何の「不運」が訪れる？

「・・・にしてもよッ、最近は変なノイズばかりだなあ。」「貴方も？ 自分も感覚に違和があるんだ。」「お前さんの能力は？」「ああ、人の気配を感じ取る程度の能力さ。何か、1ヶ月前から潜んでいた奴らに気付いていた「勘」だった、とかね。」「勘なんて古臭い概念を信じるなよ。世間話で留めず真面目に研究するべきだったぜ・・・ヘッ、虚無だなッ。」

—— 思い出した。彼らは時々、謎の対象へ・・・それこそ虚無に向かって会話する癖があった。いや、報告だ。私たちを殺そうとしたとき、こちら・・・「チームA」と。



古風な恰好をした大勢の村人は、何やら討論を行っている。おそらく、仮設本部の話聞いて襲撃でも企んでいるのだろう。そう噂をすれば・・・ヘルメットを外された調査隊員の一人が無防備に、

こちらへ向かってくる。生憎、彼の名前を思い出すほどの面識はない。

「・・・どうやら、互いに相方を失ったらしい。」「お前は確か、チームCの主任だったな。」

「そう、えーっと。自分はリゴン。」「・・・フェドだ、今更だが。」「君ほどのタフガイが捕

虜になるとはね。」「ハハッ、こんなに自由な捕虜とは、相手も我々を舐めているようだ。」

彼らの能力を目の当たりにするまでは、確かに平和な世界とギャップが存在した。これほどのエネルギーを発揮するとは・・・いや、生命力と言うべきか、彼らの容姿には、自然と共存を図る息遣いすらも感じられる。それに、彼らは原始的な生活が似合わないほどの美顔だった。

第1調査隊が派遣された後に一戦を交えたという機密情報は教えられたが、今日まで《海の民》と呼ばれる我々に対抗できる策を備えていたことに、敵ながら安心した。・・・彼らは多くの仲間を、《ティロディアクボ》からすれば極小でも絆の強い仲間を失ったのだ。当然と云えば、そうだった。

「翻訳機を捨て、情報を守るとは見事だったな。」「おっと、見当違いだ。自分は、彼らが攻撃されるのを防ぐために手段を絶つたに過ぎない。」「・・・お前は、寝返ったのか？」「いや、

うーん。自分は平和を望んでいる人間かな。」「そんな呆れた理由とは、兵士として失格だぞ。」

「ああ、そうだよな。・・・でも、貴方は命令に忠実というか・・・残酷だ。こうやって、捕虜を偽る“なんてさ。この座標、敵の勢力、全ての会話が筒抜けでさ。」「【未知は目の敵、未知は

己の敵】というわけだ。奴らに俺たちの情報を渡すぐらいなら、俺たちも奴らの情報を送るのが最な務めだ。そんな忠誠心を持たない曖昧な奴は、何の役にも立てない。お前も家族を忘れてしまったのか？」「・・・確かに、翻訳機を捨てたせいで彼らの言葉が分からなくて困ったよ。・・・翻訳機

の仕組みは、知っているだろう？」 「本部のサーバーを介して、声質を保持しながら翻訳を・・・そうか。記録に反逆行為を残さない工夫は、誉めてやろう。」

「自分は、真に平和を望んでいる。家族を守る。彼らを守る。貴方も気付いているだろう？ ここは“資源”を目的に襲われていることを。」 「俺はリスクを冒したくない質でね、愛すべき家族の無事を第一に動いている。お前は“板挟み”ではなく、国と彼らに“挟まれて”いる。現実には気付いたほうがいいぞ。訴えられてしまえば——」 「承知さ。だから、こうして説得している。・・・変だと思わなかったか？ 君は“ここに初めて僕らの状況を知った”ことに。」 「——まさか。」



「・・・！ 来るぞ！」 「えっ？ 来るってn 「複数人の気配！ 全方位から！」 「！」

隣で笑談していた男の叫びを境に、皆が態勢を整えた。私は銃を構えて、静まり返った周囲に耳を立てる。—— 僅かに聞こえる茂みの音。それに気付いた私は銃口を、そして皆が一斉に氣を向けた。

「・・・おつ、うわ！」 「パディ！」 「俺たちは敵じゃねえよ！」 「何だ・・・ 「違う、

君たちじゃない！」 「・・・。」 「多いぞ・・・6人以上だ。」

事態を察したパディマティスも銃を構える、しかし町長は、小声で策を提案した。

「最終手段だ、例の波動で奴らの攻撃を封じるぞ。」 「いいのですか！？ アレを使うと・・・ 「やむを得ん、ここで死ぬよりはマシだ。」 「・・・了解。」 「近いぞ！ 78メートル！」



「すみません・・・皆さん、耐えてください。」

「2人とも、銃を捨てな。」 「・・・何をするの?」

「ない能力——だが、14年前でh 「39メートル!」

「《グリッチ》だよ。ほとんど使い道がない能力——頼んだ・・・ガリン、メアンメト。」

眼帯の男が呪文を唱えた瞬間、多くの人間が身体を“固めて”しまった。中には全身が痙攣する者、頭を抱えて唸る者、発作に耐えられず嘔吐する者、その数秒間は、無機質な阿鼻叫喚・・・そんな単語に相応しい光景だった。

《無能》の自分には何も分からない。隣のパディマティスやマエレは意識が危うく、《グリッチ》を発動した彼も自滅したのか、体力を使い果たしたのか、失神してしまった。それは人に留まらず、稲妻が走った銃も同様に影響を受けたと思われる。これが、14年前に発揮された——《海の民》が持つ魔法を無効化する能力なのか? ——間もなくして敵は茂みから姿を現した。我々の自滅を期にしたのか、ヤケクソ気味で銃を構えるも、そこで彼らは銃が壊れていることに気が付いた。

「!? .....ッ!」 「鏝鉄! 鏝鉄ッッッ!」

その大声に、敵は背を向けて逃げ出した。しかし早期に回復した戦士は、散り々に逃げる《海の民》を全力で追い駆ける。彼らの多くは脚が速く、鋼鉄の身体に体当たりされた敵、豪速の石を投げられた敵、そんな鈍い音が聞こえる最中、あちらの奥では明るい炎が揺らめいている。湿気が少ない今の時期に火を使うとは、後々の消化が面倒だろうに・・・。

「はぁ・・・これで“また”敵の手掛かりを失いましたよ。」 「命が助かればそれでいい。機械は敵の仮設本部にある。そこで新しい情報と技術を手に入れるのだ。」

「ちえッ、この銃も壊れたのか。役に立つ武器だったのに。」 「いいじゃない、方角が分かるだ

けで《無能》の私よりも役に立つんだから。」 「いい度胸だ、《入力型》の逆鱗を・・・」 「皆、

捕虜がいない！ あの大きな男が！」 「！」 「野郎、ドサクサに紛れて逃げやがった！」

次々と戻ってくる戦士と、担がれたり引き摺られる《海の民》に、その男は見当たらない。しかし彼には武器も防具も———そうか、ヘルメットは味方同士で交信するための道具なのだ。既存のテレパシーではなく、生の声で会話や報告を行っていた。機能が壊れて連携が取れなくなったのだから、彼らは大声を出した。偵察の気配もなしに全員が私たちを囲んだのも・・・嗚呼、そういえば大男は座標らしき数字を口にしていた。———そうだ、こちらの情報は全て漏れていた。

———と、いうことです。」 「・・・翻訳機”もあれば、通信機”もあると。何と、安全の管理が甘かった。」 「仕方ないよ親父。14年前も、奴らの全貌が分からなかったんだろ？」

「・・・そうだな。・・・しかしだ。リスクを冒す分だけ絶える命は増え、リスクを冒さなければ後に駆逐される運命にある。その判断を下すことは・・・とても、重いんだ。」 「・・・。」

「勝ちますよ、いや、何が何でも生き残りますよ。私は《海の民》を間近で見て、勝敗は魔法でも情報でもなく、絆というか・・・「集団の意思」が決め手だと悟った。」 「・・・ほう。」 「彼らも、人間でした。欲望に忠実な者もいれば、確固たる意志で動く者もいる。全員が全く同じ目的を持つことはないでしょうけれど、彼らは・・・戦争を始めた“本当の目的”を、何一つ語らなかった。いや、知らなさそうだった。」

私たちの言葉を聞いた町長は膨らみのある鼻髭を摩りながら、最後に深い息を吐いた。

「・・・どうやら、時代は進んでしまったようだ。」 「・・・？」 「リクレアが疑問を抱いた

『集団の意思』というのは、社会の規模で『希釈』されてしまう。その目的が社会の利益になる内容でも、個人や集団が不満に思うのなら、意思は成り立ちにくい。——彼らは知らないんだよ。」

「・・・そうなら、どうして奴らは目的もなしに俺たちを殺そうとする！？」 「存在するのさ、

『本当の目的』が、それを持つ人間が。・・・私は『罪』を持たない人間を殺したくない。お前も、何れは分かる。社会の長として判断を下す苦しさだ。」 「・・・。」

パディマティスの父親は私たちに苦惱・・・理論を語り終え、再び戦士たちと会議を始める。彼の話を聞いたせいか、妙に憂鬱だった。私たち・・・特に、大切な何かを失われた人々は、誰を憎むべきなのか？ 兵士？ 頭領？ 戦争という概念？ 憎むべきではない？ 何をするべき？

乾いた土に踵を押し込み、私は空を見上げた。そこに浮かぶ『居留地』まで、いや、彼らの故郷である『ティロディアクボ』まで行かなければ全ては解決しない。鳥のように空を飛べる人間は聞いたこともないが、目の前にいる『海の民』は何かを知っている。知らなければ、学ばなければ。町長のような指導者を気取っているわけではなく、ただ、恐怖を感じて生きたくない。自分が『無能』でも、それが人の強さと無関係であると思いたい。だから私は——地図を作り続けていた。

「・・・私も、仮設本部へ行く。」 「レア、お前は・・・」 「行きたいの、魔法は関係ない。」

「・・・彼らの気持ちを知るには、私も彼らから学ばなければ。」

T I P・・・魔法に頼った原始的な生活が垣間見える《フォルタグルンドウ》ですが、実は私たちが知る歴史の常識とは大きく異なり、その一例として出生率が2以下（推定）と異様に低かったりします。彼らの生命力について以前のT I Pで話したと思いますが、一生が安定しているので平均寿命が高く、それ故に先進国と同程度の出生率でも問題なく社会が存続されます。その他にも産業革命を成さずに高度な技術の一部を持っていたり、ほとんどの民族が飢餓を経験していないなど、魔法の存在を知らなければ意味不明な歴史が刻まれています。

あれから疑問が晴れないまま、新しい一日を迎えようとしている。午後の仕事を終えて皆は自室へ帰るも、精神の居心地が悪い自分は夜食を平らげた今も《情報端末》を片手に居座っている。

閲覧可能なデータベースやレポートには別の言語と思しき情報など見当たらず、《保存者》が公開する資料には古の文化や歴史と関連する古代言語の研究も僅かに記述されているが、そんな不便な言語を暗号や流行として使う理由はない。

昼頃に聞いた声を軍人として仮定しているのが間違いなのか？ あれは《保存者》のグループで、《フォルタグルンドウ》の肉食動物を駆除する最中に《前人類》の遺跡か遺物でも発見して、今から《保存者》が現場へ向かうとか？ しかし肉声を翻訳する意味は何だ？ 対話可能な記録媒体が残っているのか・・・まさか《前人類》が生きていたのか？

とにかく、何かしらの事情があるのは間違いない。もしかすれば、第1調査隊は《前人類》に助けられて全滅を免れたのかもしれない。虚しいほどの憶測だが——その可能性は捨てられない。

小皿にカトラリーを置き、人気の少ない《通行搬送帯道》を歩き、薄暗い明りに包まれた道を潜り抜けた先にあるのは、兵器開発1課の研究室・・・本格的に調べなければ、その真相が何であれ、辿り着くまでは眠れそうにない。《科学者》が知る必要のない情報でも、それは自分の決意となる。

知りたい。この失踪感、この違和感を埋めるために、IDカードを鍵へ翳す。灯りも付けず自分の机に《情報端末》を接続する。給湯室へ行つてはコーヒーにバター入りのミルクと大量のカフェインを加えて、それを飲みながらバックライトを放つ《ペーパー・モニター》へ血眼を走らせる。ブラウンザーとノートを往来して約1時間——日付が変わる寸前、ふと、一つの情報に目が留まった。

## 04. 受け継がれる使命

「被験モデル・・・《再生者》の可用率・・・？」

それは、《フォルタグルンドウ》に生息する肉食動物の詳細な情報と、様々な兵器を用いた攻撃が与える威力の予想やシミュレーションが纏められた資料だった。軍事省のデータベースに保存されているものが、何らかの不手際で科学省の人間にも公開されている。

その中に記されていた《再生者》という項目・・・そんな役職は初耳だった。《治療者》でもなく、《再生者》という単語で正しいのか？ しかし《再生者》の注釈を発見したとき、謎は更に深まった。

「これは能力に関わらず、全ての《旧人類》が獲得した・・・種族を表す別称である・・・？」

・・・《旧人類》とは何だ？ ・・・《前人類》ではなく？ これも誤字なのか・・・いや、綴りが全く異なる。生き残りの《前人類》を《旧人類》と呼んでいる？ それも変だ、わざわざ区別する理由がない。それに、この資料が作成されたのはタイムスタンプからして20年も前だ。《旧人類》の存在は既に確認されていた？ それなら、その存在を極秘にする意味は？ 機会を伺って公開するつもりなのか、それとも、何か不都合があったのか・・・。

・・・《再生者》という単語を素直に受け取るのであれば、今日まで生き残った彼らは何かしらの

特別な自己治癒力を持っている？ 待てよ、前提が間違っているのかもしれない。《旧人類》とは、人間が持つ本来の能力を解放した《新人類》という・・・憶測の憶測など無意味だ。関連する情報を集めなければ。文字列が含まれる他の資料を——

さざん ちゃん

「！？ あ・・・すみません、残業中です。」

突如として扉が開く音、そして微かな足音が聞こえた。暗闇の中で画面を眺める自分に、警備員が不信を抱いたのだろう。こんな説明も厳しい状況に・・・まずはIDを示さなければ——

「・・・サイロ？」 「そうだ。・・・こんな時間に、何をしている？」

そこには、薄暗い姿の彼が僕を見下ろしていた。光を反射する眼鏡が、余計に不気味であった。

「えっと・・・今日みたいなミスや不手際がないか、探していたんだ。何だか不安になってね。」

「・・・そうか。」 「逆にサイロは、どうしたの？」 「・・・嗚呼、オクデιβ。君も、その資料」

に辿り着いてしまったのか。」 「・・・！」

迂闊だった。彼は既に、情報が丸見えの《ペーパー・モニター》を凝視している。自分が下手に法を犯している内容へ。しかし——その口調は、嘘を吐いている僕を見透かしていた。

「え？」 「《旧人類》の正体は、どこまで分かった？」 「え、いや」「隠さなくていい、スケ」

プトほどの人情はないが、同じ仲間だろ？」 「・・・生き残りの・・・《前人類》か？」

「疑っているのか、正解だよ。・・・《旧人類》は《フォルタグルンドウ》の世界を生きる——

2000年前に《新人類》と別の道を歩んだ人類、それが答えだ。」 「・・・知っているのか？」

「そうだ。・・・2年前から、全て知っている。」 「・・・。」 「・・・知りたいか？ 真実と

か言われる、そんな情報を。」

サイロは唐突に、自分の核心に迫った。平静を保ちたいが、謎だらけの情報に脳は混乱を起こしている。彼は陰謀論の信仰者ではなく、本当に何かを知っている？ なぜ、知っている？ そして彼は——敵なのか。いや、彼は——僕に何かを望んでいるようだった。

「・・・知りたい。」 「そうだと思った。・・・初めに断っておくが、今から話す情報は誰にも話すなよ？ 分かるよな？」 「・・・まあ、そうだよな。」 「独り言も、決して、口にするな。」

お前が必要になったら、その時はインカムを細工してやる。」 「細工？」 「ノイズを加えて音声の・・・それは後だ。覚悟して・・・黙って、俺の話を聞け。」 「・・・分かった。」

サイロは唾を呑み、口を開け、話を続けた。その内容は社会や経済などの規模ではなく、これまでの歴史が覆るほどに大きな——事実だった。《フォルタグルンドウ》に隠された《旧人類》の過去と生誕、《ティロディアクボ》に潜む賢者の謎、《移住計画》が持つ2つの目的、全てが——脳に刻まれてしまった。その1時間は知を得る幸福よりも——居所の分からない苦痛が続いた。



「話以上だ。」 「・・・。」 「・・・泣いているのか？」

これは、何を示す感情なのだろうか。今まで自分を欺いていた世界に対する恨みか、世界について何も知らなかった自分に対する恨みか。ただ、どうでもよく、ただ、悲しかった。



御伽噺だと思いたい。しかし、その物語は映像や音声で記録されている。緑色に染まった大地と、そこで繁栄した《旧人類》の村々。その幻想は、衝撃を合図に崩壊を始める。その全ては、軍事コロニーが目撃していた。

「・・・もう、遅いのか？」 「・・・いや、計画の第2部が継続されるなら、彼らは今も奮闘している。」 「嗚呼・・・今にでも終わり・・・駄目だ、このまま・・・畜生ッ。」

5人の賢者が「誰」なのかは完全に不明であり、サイロが賢者というわけでもない。ただ、賢者の名を継ぐ者は2000年前から《フォルタグルンドウ》に住む《旧人類》を、魔法という力を普遍的に持つ《旧人類》を知っていた。そして、彼らは《旧人類》を排除するために《移住計画》を企て、同時に侵略を進めていた。それが、社会の指導者が持つ使命の一つであった。

今日の世界が在るのは、過去に——魔法が使える《旧人類》の迫害によって我々が《テイロディアクボ》へ辿り着いた故なのか、魔法が使えない《新人類》こそが本当の戦犯なのか・・・誰が悪いのか、何が悪いのか、それはサイロも知らなかった。——誰も知らないから、今が在るのだろう。自分は何をしたい？ 何を思っている？ 信じられるのは自分か、賢者か、もしくは歴史か——

「・・・そうか！・・・だから昨日、追加パッケージで武器を無効に——」「無効？ 昨日の入れたプログラムには、小細工も何もないが。」 「・・・え？」

「武器を使えなくしたところで、どうなる？」 「・・・。」 「どうにもならない・・・責任は俺たちが負うことになる、戦場では別の兵器が導入される、それで死者の数は変わらない。俺たちは・・・何もできない。考えもなしに動いたところで、迷惑が増えるだけだ。」 「・・・。」

自分は何もできない？ 何も思っていない？ 戦争を知らない無知な自分は、意味がないのか？

「・・・サイロは、どうしたい？ この、今の状況を。」 「何だか、人任せだn 「違うッ！

・・・分らないんだ！ 誰も悪くないのに、どうして争う！？ 何が悪い！？」 「魔

法。・・・魔法という概念が、悪の根源だ。」 「何故！？」 「力が大きすぎるんだ！ 一人が持

つには膨大すぎるエネルギー・・・それは「神」にも成れる、制御不能な「神」になッ！」

「・・・」

2人は大声で感情を投げていた。ふと、客観的な視点を取り戻し、同時に様々な恐怖を思い出す。今——人工物に囲まれている全ての空間は、危険なのだ。・・・議論や行動は慎重でなければ。

「・・・それは、消せないのか？ 少なくとも、残酷な方法を避けてさ。」 「・・・無理だな。

人間の意志ではなく、物理的に不可能だと云われている。そもそも、魔法という存在が謎に包まれている。」 「・・・これは「弱肉強食」なのか？」 「・・・」

理とは、何なのか。異端なのは賢者ではなく自分？ いや、それを大衆に隠し続ける経緯には大衆の不満を予知しているはずだ。これも理？ 正しさとは、個人の尺度に過ぎない？

「・・・《新人類》と《旧人類》、どちらに付く？」 「・・・？」 「《新人類》が《旧人類》

の家畜とは言わないが、少なくとも対等にはならない。文明人を気取る今の《新人類》も《旧人類》を「動物」として比喩している。」 「・・・何が言いたい？」 「自分は《新人類》だから、生き

残るために《旧人類》を排除することは否定しない。手を汚そうと、身を守るなら否定しない。」

干渉するな———と例えば「悪の根は早めに刈り取れ」と返されるだろう。この計画は自分の社会

を守るため、あるいは未来の社会を保つために存在する。—— 違う・・・《新人類》と《旧人類》は、異族でも—— 同種のはずだ。

「・・・本当に・・・本当に、彼らは脅威か？」 「・・・俺は、そう思う。」 「そう」思うだけで、僕たちは《旧人類》に幻想を抱いてないか？ 火炎を放射すること、物質を変化すること、それは科学を知る《新人類》にもできる。だから、今も両者は「奮闘」している。そうだろう？」

「・・・魔法は、武器を持たない俺たちを脅す武器だぞ？」 「そうだよ！ 魔法だって未解明の科学の一つだろ？ 科学を知らない彼らも同じだ。何も、特別なことじゃない。」 「・・・。」

宗教が廃れる中で科学が生き残り続けたのは、全ての結果が時間も場所も関係なく「平等」に実現するからである。この世界に確かな魔法が存在すれば、それを・・・科学が受け入れてはならない。

「武器は、現実存在する。問題は—— それを使うことだ。」 「・・・？」 「【武器が自他の運命を平等に扱う】意味は、使い方ではなく持ち方こそが本質なんだ。」 「・・・。」

「互いに武器を構えれば、それでいい。それが、—— “平等”を成立させる。」 「・・・！」 「・・・お前は賢いな。・・・そうか。・・・そんな未来も、悪くない。」 「“恐怖”なんだ。

互いの武器を互いに知らないから、むしろ突き進んでしまう。科学を知る《ティロディアクボ》が、未知を恐怖に思うなんて—— 滑稽だ。」 「・・・本当の恐怖を、見るべき・・・か。」

「敵を知る—— それは戦うためではなく、守るために。」 「嗚呼・・・良い考えだ。俺たちは・・・俺たちこそが、科学を忘れていたんだな。」 「・・・そうだね。」

世界が科学で説明されるのであれば、人間が存在する限りは諺も不滅なのだろう。数値や具体を持

たない諺は、曖昧でありながら——多くの問題を解決できる道具だと悟った。

「それでも今、俺たちにできることは少ない。情報もなければ、解決も」「今からだ。ここで無理なら《フォルタグルンドウ》で動けばいい。それは——

この時を、不意に望んでいたのだろうか。今の自分には、妙な決意が芽生えている。

“諺”とは——両親が自分に残した唯一の本であり、2人の会話に必ず登場するものだった。今なら、その意図が分かる気がする。時空を超えて伝えられた知恵、それを議論する父と母は——

「第1調査隊。彼らのように、自分は・・・《フォルタグルンドウ》へ、行かなければ。」



口では物事を容易く言えるが、それを現実にするのは難しい。地上すらも見たことのない自分たちが、1億キロメートル彼方の惑星へ行けるのだろうか、そんな不安を憶えている。多少の宇宙工学を理解しようと、経験がなければ知識は本能的な恐怖に冒される一方である。

命を危険に晒す覚悟、法の一線を超える覚悟、それらは決意と対峙する。例えば今、自分の全身に滴り落ちる水は、惑星の重力から解放されるとゼリー状で宙を漂うらしい。液体とゲルに境界は存在しないが、2つの状態には異なる名称が付けられている。自分は今、そんな存在しないはずの“膜”を無意識に求めている。

日付が変わり数時間後、シャワーを浴び忘れていた自分の体は共用の入浴室で温水に叩き付けられ

ている。汗の一つも出ない快適な環境で毎日のように体を洗う習慣には疑問を抱いているが、どうも、体を洗わなければ精神的に落ち着かないのが人間の性らしい。

温水、洗体、温水、洗顔、温水、そして乾燥。——次は、2つ目のフェーズである。《フォルタ

グルンドウ》へ行くという目的は無謀に思えるかもしれないが、《ティロディアクボ》の軍は物資や武器を現地へ供給するために輸送船を定期的に送り出している。そして、《移住計画》の第2部では《FF》や《MRG》を使用するために大型の輸送船を使用すると予想している。そこに潜り込めば、それだけで目的を達成できるのだ。・・・片道切符になるかは、状況次第となるが。 ヤァッ

再び温水を浴びながら、その具体策を考える。船はどこにあるのか、そもそも、船の容姿すら不明である。加えて出発日時も非公開とされているが、《双破空間飛行法》を駆使しても惑星間の移動に9日は掛かるというのだから、現状を考えれば明日にでも出発したいはずである。ただし、今日も《MRG》の最終試験に関する報告が来ていなければ、少なくとも2日後、それまでに侵入の目的を立てればいい。簡単・・・と憂いなく思いたいが、どうにも、その先の見通しは立ちそうにない。

無謀な計画など人生で一度も立てたことはないが、素人目にも情報が不足しているのは明白である。サイロは世界の歴史や政府の現状に詳しい。しかし、全てを把握しているわけではない。更に言えば、情報のソースも曖昧である。確かに情報は真実を示しているが、それらは彼が収集したものではなく、名も顔も分からない——“ニーブ”と名乗る者が、彼に提供したものである。 ザ

それでは、サイロが選ばれた理由は？ 確かに彼は一流のソフトウェア設計者だ。《広域通信網》から《幽霊線》を伝って彼女に出会ったのだろう。一方で、ニーヴが真実を教える理由は？ 立場が

弱いから他人を頼るのか、政府に革命を起こすための選別をしているのか、——政府が革命を防ぐために戦犯を炙り出しているのか。・・・考えては駄目だ。誰かの思想ではなく、その【事実が自身の心を動かす】のだ。ヤッヤ

鏡に映った心許ない自分の頬を叩き、上に向いた顔を手で洗う。今は、母船に乗り込む計画だけを考えるのだ！ 2日後・・・いや、明日までに。自然な流れを意識しろ。——兵士は《MRG》の扱い方を熟知していない。性能評価に伴い実際の威力を映像として残しているが、安全装置の解除が複雑で・・・いや、それは顧問の仕事か。ならば、仕様の手違いが発覚したと報告を・・・すれば、自分が、それどころか1課の面目まで潰れてしまう。ヤッ ヤッ ヤッ ヤッ

目立つような行動は禁物だ。全身に満遍なく纏わり付く温風のように、自身もノイズの一つとして振る舞えば、案外、気付かれないものである。・・・そうだ、科学省と軍事省が合同で使用する施設で在りながら度々、進入が禁止される場所——工房。中でも“F”が含まれる個所は最近になって制限が多くなった。これが輸送船の入出と連動している可能性は高い。兵器の搬入は——ヤッ

「イ——さあん！」 「オクディブさん！」 「！？ は、はい？」 「すみません、服を着てからで構わないので、個室から出てもらえますか？」

温風が収まると、唐突に誰かの声が壁上の隙間から投げられた。入浴室から脱衣室へ移り、湿気が残る身体に袖を通して、扉を開けると——そこには見慣れぬ、薄暗い制服を着て・・・後ろで腕を組む2人の男性が立っていた。

「どうかしましたか？」 「嗚呼、こんな時間に申し訳ないです。貴方が開発している《MRG》

について、幾つか聞きたいことがあると、至急の連絡を頂いたものですから・・・「あ、そうですね。分かりました。」

このタイミング・・・つまり、出航が一刻を争っている。おそらく、最終試験で発見した疑問点を払拭する段階だ・・・好都合すぎる。ここで《MRG》の行先を追跡さえすれば、確実に乗り込むことができるのだから。

「ああ、そうだ。同僚に連絡を・・・」「必要ありませんよ。先程、サイロという方に伺って来たので。事情は話してあります。」「そうでしたか、それなら——」「大丈夫ですか?」「嗚呼、最近、立ち眩みが酷いもので。ハハッ・・・」

自分は、今の違和感を見逃さなかった。洗面台へ向かう自分に対して、頑なに背後を見せない彼らを。組んだ手を崩さない彼らを。そして、対面の鏡には・・・銃を隠し持つ彼らの姿が、写っていたことを。顔を洗おうと屈んだとき、僅かに服の擦れる音が——彼らは、銃を腰に仕舞った。

「失礼しました、では、行きましょうか。」「こんな時間に、ありがとうございます。」

一人は案内のために先を行くが、対して別の男は自分の背か横を維持して歩く。嗚呼・・・これは逃走を阻止する態勢だ。彼らは自分が勘付いていることに勘付いている? 待て、サイロは無事なのか? 整合性を保つのであれば彼も他の要件で尋ねられているのか、それとも・・・。

自身の平静な様子、その内部では、絶えず鼓動が響き渡る。こうして偽るということは、変に事を荒らしたくないのだろうか。ただし、無暗に動けば酷い仕打ちが待っている。ついには1課の研究室を通り過ぎた。今は人気もない。

彼らは何者か。考えられる最悪の想定は・・・今までの会話が筒抜けだった？ 右耳に掛けているインカム——しかし、研究室を出てからは何も喋っていない。あの空間は、物理的に全ての電波を遮断している。《通信網》にも強力な《防御点》を設置している。穴は存在しないはずだ。

それとも、例の資料を閲覧したのが原因か？ これは単純な取り調べなのか？ 違う、あれこそが餌だった？ ここから何処へ・・・嗚呼、ここから如何すればいい？ 何か、行動しなければ。

「それにしても、珍しい制服ですね。軍事省の方ですか？」 「これ、実は最近の《移住計画》に伴って作られた所属なんです。カッコイイでしょう。」 「なるほど、確かに、センスが良い。」

彼らはプロなのだろう。その話し方は何の変哲もない、普通の人間と云えるものだった。しかし、何とも言えない視線を感じる。自分の行動は全て、読み取られている。今は、何もできないと——

「あら、オクディブじゃない。」 「・・・え？」

その時だった。——何故か、ストゥが正面を歩いていて。こんな夜中に？ しかし理由を考える間もなく、彼女は一直線に、僕に抱き着いた。

「もう！ 部屋を尋ねても居ないんだから・・・今晚は“逃がさない”よ？」 「ほ、ほら、人前でそんな「じゃあ、戻って——」「すみません、彼には重大な用件があるので・・・今日は、お引き取りください。」 「ちえ、仕方ないわ。ごゆっくり！」 「ま、また、明日・・・今日？」

初めに断っておくが、ストゥとは濃厚な愛撫を交わす関係ではない。布越しにも伝わる柔らかい胸を押し付けられた今の出来事に・・・鼓動が高ぶる理由すらも分からなくなってしまう。妙な口調と耳元に囁かれる言葉が・・・もう！ 今のは何だ？ 帰ったら、無事に帰ったら問い詰めて——



「・・・・・・」 「・・・・・・」 「・・・・お熱いな。」

嗚呼、気まずい。・・・・いいや、ストウの行動には意味があるはず。同僚を茶化す様子ではない。その行動、その言葉に何か・・・、彼女が自分の腰に、白衣の内側に手を回したとき、何かをシャツとズボンの隙間に差し込んだ気がする。触感で確認はできないが、それが腰の違和感として伝わる。居ない、逃さない・・・・ゆっくり。これも何かの暗示？ そうだ、今の状況と妙に合致している。これはサイロによる指示なのか？ それともストウは今の状況を一瞬で悟った？ 確実に、そうだ。

『――』 「・・・・・・」 『――』 「・・・・・・」

微かなノイズがインカムを伝い、小骨と小骨を震わせる。これは何だ、自分に宛てた音なのか、男の通信が漏れているのか、ただの偶然か。・・・・次々と訪れる非常な現象に、もはや、考える気力も枯れてしまった。何一つ真面に予想ができない。・・・・畜生。非力だ、無力だ。

彼らの一転する警戒を恐れて《情報端末》にも触れられず、偶に無機質な言葉を交わしながら歩みを続けていけば、気付けば、自分は配管が張り巡らされた工房まで・・・・違う、更に奥へ。色温度が変に高い照明と荒いコンクリートで包まれた、全く縁のない場所に辿り着こうとしている。

「・・・・えーっと《MRG》は工房に「すみませんね、貴方を“そちら”ではなく“あちら”に向かわせろとの指示なので。」 「・・・・その、“あちら”とは何処なのですか。」 「・・・・誰も立ち入ることのない、“特別”な場所です。」 「・・・・あ・・・・ッ。」

TIP・・・《ティロディアクボ》の地下には血管の如く道が複雑に延々と張り巡らされていますが、そこに住む大半の人間は地上の様子を直視することなく、青空や星空の美しさに触れることなく一生を終えます。陸地が少ないという理由で地下に都市を構えているではありません。海面が9割を占める《ティロディアクボ》は大規模かつ不安定な気流・気圧の変化により暴風と暴雨が絶えず、晴れた地域には太陽風が容赦なく当たり、変動の少ないスラブが由来して水には重金属や塩分が多く含まれています。そんな環境だからこそ、《新人類》は生きるために技術を磨き上げたのです。

黄昏は消え去り、木々の隙間から見える夜空には無数の星と虹色の幕が広がっている。しかし奇妙なのは、一つの見慣れない、赤色の星だけが流されず——あれが、彼らの居留地なのだろう。14年前に彼らは浮遊する移動手段を利用して、この地へ降りた。逆も然り、それを利用して、私たちは居留地まで行けばいい。情報の手と脅威の制圧が、この戦いを決めるのだ。

仮設本部へ襲撃に向かうのは、パディマティスやマエレといった《入力型》の民を含めて25名。こちらには“気配を感じる男”や“暗闇を見る女”も付いているのだから、敵地を掌握するには申し分ない。敵は既に8……いや、7名も確保している。あの男……フェドという名前らしいが、連絡手段が絶えた彼も仮設本部に向かったと考えるべきだろう。

「先が開けている、迂回するぞ。」「了解。」「——今の音は!？」「大丈夫、ただの小動物だ。他に……! 微かに気配が見えるぞ。あれは敵というより……仮設本部そのものだ!」  
「本当か?」「嗚呼、慎重に行こう。」「……この銃、意味あるか?」「ハツタリでも、使えればいいのよ。」「爺! 口を開けるな! バレるぞ!」「すまんのう……眠い。」

私は……町長と比べれば頭脳は劣るが、数術の力は誰にも負けない。こうして隊に入っているのは——嗚呼、私を止める者……私を留める者がいないのか……。家族と合流していれば、私は来なかった。本当は家族に会いたい、しかし、今——それ以上に私の好奇心は強かった。故郷と隣人を壊した憎しみは、好奇心の動力源なのか、好奇心が抑止力なのか、とにかく利用したかった。

私たちは警備を一人、また一人と静かに気絶させる。こうして、私とパディマティスは先程と少しだけ形の違う銃を手に入れる。ただ、その重量は——人を殺すには充分だった。

## 05. 単調な事象と混沌の世界

仮設本部の周囲は粗方、音もなく制圧することに成功した。次の段階では《入力型》の民が少人数で偵察を行い、それ以外の《出力型》の民は遠方で待機する。しかし——ここからが難題だった。

「つまり、貴女と同じく奴らも暗闇を見ることができるのか？」 「ええ、確実ではないけれど、明らかに普通ではない光が一面を照らしている。」 「・・・うむ、まるで分らん。」

彼女の助言に従い施設の周りを慎重に探索するが、何処にも抜け穴はない。気付かれずに奇襲は不可能・・・そうなれば、如何に迅速な制圧を——

「上はどうだ？」 「上？」 「木々を伝って天井から侵入するんだよ。上に光はないんだろ？」

「そうだけれど・・・。」 「その木々は、この有様だぜ？」 「・・・。」

パディマティスの妙案に、皆は意見が分かれた。目の前にある仮設本部は普通の森林を無理矢理に開拓した場所であり、その周囲13メートルは木や草が綺麗に刈り取られている。樹木の頂上から飛び降りても届きそうになく、金属のような素材に包まれた天井を突破できるかは未知数であった。

「内側から突撃できる、唯一の方法だぞ。」 「だよねえ・・・僕たちの行動が筒抜けだったということは、今も警戒しているはずだよねえ・・・。」 「ここ辺りで倒した敵を考慮しても、残りは

14人。向こうからすれば、自陣を全力で死守しないと間に合わないはず。」

「人質を盾に正門から入るのは？」

「躊躇なく味方の頭を撃ち抜く連中だぞ？」

「内部が見え

ないから、情報もなしに突入は——

「皆！一度、待機している組に合流するべきよ。ここで議

論しても埒が明かない！」

「……。」

マエレの意見に全体の熱が下がり、私たちの組は戻ることにした。既に外部は制圧したのだから、今では怯える必要もない。それでも早く——だが、男の声を境に全員の肝は冷え切った。

「——いない。」

「？」「もう一つの組が、見当たらない！」

「は？」「私も発見でき

ない！」

「……道を間違え」

「いや、何かが、起きている！」

確かに約束した場所は、蛻の殻だった。抗争した痕跡は見当たらず、連絡役を担う双子は——

「……違和感……これだ。」

「な、何がだ？」

「ノイズだ。僕の間を捻じ曲げている。

本当はいるんだ！ 奴らの技術でえ——

「……」

「……」

突如として、男は地面に膝を落とした。この一瞬で何が——

「逃げろッ！ 分散だッ！」

「……」

誰かの指示に、私を含めた全員が四方八方へ走り出した。攻撃されている。昼間に見た派手な攻撃ではなく、静かに人を——いや、殺されたとは思いたくない。思いたくなかった。

「レアー！ お前も反撃しろッ！」

「無駄！ 直進よッ！」

後ろを走るバディマティスだろうか、彼は逃げながら、標的も分らず銃を乱射した。おそらく敵は私たちの能力に検知されない何かを——とにかく、ここは初めから敵の掌であった。

フェドだ。尋問を受けた彼が《入力型》の能力を伝達したのか分析したのか、その弱点を利用して  
いる。彼は既に潜んでいた。先を読まなければ——このままでは、一方的に不利だ。

「パディ！ 湖に！」 「えっ、えっ！？」 「とにかく！」 「ハア・・・ハア・・・待つて  
よお！」 「マエレも！ 早く！」 「えっ。ええっ——、」

私たちは水面を靡かせないよう慎重に、少し冷たい水に全身を沈ませた。暗闇を見ていた彼女が気  
付いた光——それを“利用”しているのならば、その“弱点”も同じはずだと予想した。森林の中  
よりも更に暗い空間を、未だ、未だ、刻々と——嗚呼、——違う、私は闇の中へ落ちていたので  
はない。何もできないのではない。今は・・・間違ではない！

「——ブハッ。」 「・・・」 「マエレ、抱き着くと泳ぎにくいだろう。」 「・・・泳げ  
ないんだもん。」 「・・・寒い。」 「・・・行き成りで、ごめんね。」

対岸へ辿り着き、ゆっくりと服の裾を絞り上げる。周囲は暗闇で、静寂で、誰も——いいや、夜  
が明けるまでは留まるべきだろう。

3人は其処の茂みに隠れて、震える体を寄せ合った。そうすると気持ちが安らぎ、思考ができ  
る。・・・そろそろ、雪が降り始める時期・・・皆よりも寒さに弱い私は、服を重ね始める時期であ  
る。・・・その着物は、先程まで隣にいた姉妹が作ってくれたものだ。しかし、今は灰となり、そし  
て、雪が積もり——

涙を流していたのは、全員だった。次々と隣人が消えていく——次は私かもしれない。このまま  
攻めることも、無事に返ることもできない。動くことは許されず、夜を越しても敵が引き上げる保証

はない。絶望的な状況に・・・涙も枯れてしまった。

「・・・もう、眠りたい。」 「・・・嗚呼、眠りましょう。今は、何もできない。」

何か起きて、何もできないしな。・・・眠ろう・・・全員で。」 「・・・そうね。」

パディマティスの言葉に、私は肩の力を抜かした。ここにいるのは《入力型》と《無能》の子供である。武装した彼らに二度も勝てるはずがないのだ。

閉じた瞼は、二度と開かなくなるかもしれない。だが、もう——思考をしなくなかった。



「・・・——うん・・・」

深く閉ざした瞼を、日光が貫通する。それは夜明けまで生き残ることができたという希望であり、絶望でもあった。——乾いた瞳と陽の間に臆気な人影が往来する。——しかし、それはパディマ

ティスやマエレではなかった。

「ッ!？」 ぎぎ 「・・・」

握り続けていた銃を男に向ける。それは緑色のスーツを纏った——明らかな敵であった。しかし彼は私の反応に、両方の掌を私に向けた。それは武器を持っていないという・・・態度・・・?

「な、何なのッ!」 「・・・」 「・・・んうう。・・・レア?・・・ひゃ!？」

一時の騒ぎに、マエレが起きた。いつの間にか、パディマティスも静かに状況を呑み込んでいた。

しかし、男は無言で私たちを見詰めている。何故なら、その頭部にはヘルメットが存在しなかった。

「・・・私たちの言語は通じない・・・。」 「おい、奴は敵だぞ！ 殺すか、何かの餌に――

「ダメよ、何も攻撃を―― 「いいや、それが罠なんだ。俺たちを――

私たちは混乱している。男は緊迫した眼で、そんな私たちを観察している。・・・何を目的に姿を現した？ なぜ攻撃しない？ なぜヘルメットを被っていない？ 分からない。ただ・・・緩んだ頬に、顰める眉は、その表情には――敵意が感じられなかった。

「――違う、明らかだ！」 「そっちこそ、感情を―― 「止めなさいッ！ ・・・確かに、

彼は信頼できない。でも、罠だったら――このまま生き延びられる確率は、皆無。・・・まずは、情報を探しましょうよ。――彼の目的を。」 「・・・。」 「・・・そうだな。」

彼と言葉でコミュニケーションを行えないが――彼は樹木が少ない平原に座り込み、水平にした手の中指を特定の方向に向け続ける。・・・何かを伝えている？ ・・・その方向へ向かいたい？

「・・・奴は、後ろに続いて行けと？」 「・・・そうみたい。」 「・・・行きましょう。」

その背中、その周囲を警戒しながら、ゆっくりと男の後を歩み続ける。森を行き交う空気は冷たく、澄み切った朝焼けが私の右頬を照らす。それは僅かながら――心地が良かった。昨日の出来事が夢であると、そう思えた。そう思わなければ、何も気が進まなかった。

「・・・「フエド」。」 「・・・。」

パディマティスが、不意に名前を呟く。・・・嗚呼、そうか。

「違うわ、多分・・・リボンね。」 「！」



確かに、彼は反応した。そう——リゴンという男も、ヘルメットを被っていなかった。

「何となく関係性が掴めた。・・・リゴンとチームを組んでいたのは彼だ。そして、2人は何故かヘルメットの着用を避けている。」「そうだな。・・・でも、変じゃねえか？ その帽子がなければ会話ができないのに、意思疎通を図ろうとする？ 矛盾するぞ。」「きっと、理由があるのよ。ほら、レアが言っていた『通信機』とか、何かのせいだ。」「・・・確かに。そうかも。」

「・・・パディ、行先は分かりそう？」「ああ、どうやら、仮設本部とは違う場所らしい。地図は——」「・・・ごめん、水へ浸かる前に隠した。」「・・・いや、どうせ、現在地も何も分からないからな。」「・・・。」

喉は乾き、腹の音が今にも鳴りそうである。それでも、昨晚の悲劇に比べれば大した問題ではない。手足が震えようと、肩が痛かろうと、彼の後を歩み続ける。その道程は、仮設本部を迂回するように冗長的であり、時折、彼は腕を見たり、私たちと同様に辺りを注意して——ついに、足が止まった。

「・・・何なんだ、あれは——？」「・・・巨大な鉄・・・いや、巨大な銃？」「そんな、巨人でも・・・居るのか？」

目の前には、複数個のオブジェクトが在った。銃口のような穴、細かな格子の穴、左右対称の「それ」は、鳥に似た硬い翼を生やしており、全体が滑らかな鼠色に塗れている。いや——

「乗り物だ。これが、『飛行機』と呼ばれる移動手段だ。14年前の戦争で——これが、空から私たちを攻撃した。」「飛行機・・・なのか。・・・敵ながら・・・見事だな。」「・・・もしかして、私たち・・・マズい状況じゃない？」

何のために、彼は飛行機を披露した？ 考えろ！——まず、情報を与えてくれた。私たちを有

利にするためか、それとも勝ち目が無いことを示唆しているのか。もし「これ自体」を与えてくれるのなら、確実に前者であるが——まさか、敵の居留地や《ティロディアクボ》へ行きたいという私の願望が読まれている？ いいや、それならマシなコミュニケーションができるはず。

32人は確実に運べる大きさ——これで兵士や武器を運搬したと予想する。仮設本部の奇襲も容易く、居留地へ足を踏み入れることも……そう仕向ける理由は？ 私たちに手を貸したところで、彼には利益も何もない。理由もなく敵へ加担するはずがない。しかし、問うことはできない。何が、彼を……動かしている？ 何を……信じるべき？

「——レア！ レア！」 「……あ、ごめん。」 「奴は——少なくとも、脚を撃ち抜いて拘束するべきだよな？」 「まさか、協力してくれる彼には感謝するべきよ！」 「まだ何も、感謝することはしてないだろ？」 ——恩もない、赤の他人が理由なく敵に手を貸すはずがないだろ？」 「逆よ、理由があるから、私たちに接触している——」「……まだ。まだ、判断するべきじゃない！」 「……。」 「……。」

皆、精神が参っていた。結論を急ぐのは、悪い結末を迎える前兆である。確か、そんな諺も——そうだ……そうだ。あの大男は、私たちに馴染みのある諺を幾つも知っていた。それは偶然でも、可逆的でもなく、時間や空間を超えて——共通した要素を、全員が持っている。それが歴史——或いは真実ならば、その中に戦争を仕掛けた理由が隠されている。そして、彼が味方を裏切る理由も隠されている。——見つけなければ。その、今に繋がる全てを。

「パディ！ マエレ！ 広い視野を持たなければ——」  
 〆 〆 〆 〆 〆

「・・・フフフ。」 「な、何よ！」 「お前の頭は冷静でも、体は正直だな。」

嗚呼、恥ずかしい。2人はともかく、リゴンの相方まで私の腹の音に対して笑うとは・・・これで場が和むのは、何か嫌だ。

ふと、彼は懷に縫い付けられた入れ物から、何かを取り出した。それは・・・金属の膜に覆われた棒状の・・・まさか、食料なのか？ それを私たちに差し出した。

「ん・・・それは、御飯？」 「正気か！？ どう見ても食べ物ではないだろ！」 「だったら、何よ？」 「レアも騙されるな！？ 奴は、俺たちが金属を食べる種族だと思っているんだ！」

戸惑う私たちに応えて、彼は何と、金属の膜を破った。すると、黄土色の固形が姿を表して・・・それを自らの口に、そして頬張った。食料である・・・毒が含まれていないことを示している？

再び、次は複数本の食料を私たちに差し出した。・・・私が恐るゝ棒を手に取り、彼を真似して袋を・・・破れない。苦笑いした彼が袋を器用に破ってくれたので・・・そして——

「・・・！？」 「大丈夫か！？」 「美味い・・・美味い！」 「・・・。」

未知の体験だった。少々の湿気がある硬いパンには「甘い」という表現で正しいのだろうか、舌が溶けるような味で満たされていた。空腹よりも刺激を満たすために、次へ、次へ、口を頬張り続ける。

私の様子に驚く2人も、同じように彼から食料を貰い——正気を失った。

「ほら、感謝する理由ができたでしょ？」 「んう、これは餌付けだ。むぐむぐ——奴の罠に、敢えて引っ掛かって、むぐむぐ——」 「貴方も、体は正直ね。」 「クソッ！ 美味え——。」

男は甲高い声で喋る私たちに微笑み、追加で食料を与えてくれる。しかし、それは瞬く間に消えてしまう。憎むべき相手のはずが、この時ばかりは救世主か——それ以上の存在に思えた。

世界の全てが虚構であろうと、私に生み出される感情は現実だった。真実よりも・・・確かだった。



『蠢芙蓉——久しぶりだな、少年少女よ。』 「!？」

それは、突然だった。以前にも聞いたことのある、乾いた声色——脱走したフェドが、私たちの後ろに聳え立っていた。

「わざわざ逃げ切れたのに、姿を現すとは愚かね。」 『蔑醜氏——お前が知る戦士の中に、背

を向けて戦場から逃げる者はいないだろう?』 「・・・正々堂々と戦わない貴方たちに、そんな志

があったの?」 『・・・』 「・・・」

当然ながら、両者が銃を構えている。以前よりも正確に、感情を殺しながら。数秒間の沈黙が続き、微風の往来と同時にフェドが口を開けた。

『萌花苦——ところで【良い隣人と悪い隣人】という諺は、知っているか?』 「さあ、そんな

言葉は聞いたこともない。」 「・・・何が言いたい?」

『鄒荀韜——同じ立場でも、異なる態度で2人が接する状況。例えば俺と、そちら側に立つ“誰か”のように。』 「・・・」 『芙蓉芙——しかし、それは個人の感情や思想ではなく・・・

そこに相手を潰け込む「計画」だと考えたことは、ないか？」「・・・貴方だって、私たちを騙す

立場にいるでしよう？」「お前は【雨雲が生み出した水面は青空を偽る】という諺を、知っているか？」「それ」の上位互換だよ。」『・・・』

確かに、初めは畏だと考えた。一方が嘘を吐くのであれば。しかし、彼が――

『詭笑芭――確かに、俺は味方ではない。味方を裏切る人間でもない。しかし、俺は――敵へ不当な苦痛を与える人間』が何よりも嫌いだ。俺を殺せるものなら、殺せばいい。それが不可能であれば、俺が殺してやろう。だが、お前たちの側にいる「偽者」は――厭らしく、殺すだろう。』  
「そんな意味のない話を、誰が信じる!？」『芾芩亭――だからこそ、変だと思わないか？有益にも無益にもならない話を、伝える意味を考えろ。』「・・・」

『覽資、――何故、攻撃力のないお前たちが選ばれたと？何故、輸送機に案内したと？誰がそれを操る――』  
会話を遮るように、パディマティスは彼の脚を撃ち抜いた。以前の銃とは性能が異なるのか爆発は

せず、焦げた穴から黒い血液が流れ続ける。以前の銃とは性能が異なるのか爆発は

「言葉で示すよりも、行動で示したらどうだ？次は頭を吹き飛ばしてやるぜ？」『・・・』  
彼の脱走により新たな死人が出たのだ。その憎しみは、一人の死では納まらないだろう。

不思議にも、フェドは一切の反撃をしなかった。顰めた顔で地に膝を付けるが、依然として態度を乱すことはなく、何か呆れたような表情に変化する。

続いて、男がフェドのほうへ向かった。彼は高い声で何かを説きながら、ゆっくりと近づき――

その内容は分らないが、フェドは言葉返す。

『・・・蕨薺酢——《フォルタグルンドウ》を守るために裏切りを提案したのは——リゴンではなく、お前だろう？ ・・・このッ、腐れ切った研究者がッ——

最後に、男はフェドの顔面へ蹴りを入れた。頭は弧を描き、瞬く間に地面へ倒れる。氣絶したフェドの銃とヘルメットを剥ぎ取り、こちらへ・・・彼が喋ると、その声が、同じ声帯で翻訳された。

『蠟苳醃——醜い争いをして申し訳ない。彼は悪い奴じゃないが、今は良くない状況だった。』

「・・・。」『芻扎芾——そうだな、僕が持つのは不安だろう。彼の銃は君に渡そう。使い方は分かるね？』「え、ま、まあ・・・。」『蹕閭莖——自分を信頼してくれて、ありがとう。察

しているかもしれないけれど、僕はパラモ、リゴンの相方だよ。』

彼はフェドと対照的に、口数が多く、口調が軽かった。若者という雰囲気、舌が回り続ける。

『錦苳藎——彼に気付かれたので、時間が無い。続きは輸送機に乗ってからだ。』「待つて・・・どうして、貴方は私たちに協力するの？」『猓莠鏹——契約内容と違ったものでね。

この悲惨な状況を生み出した「軍事省」に教えてやるのさ。平和とは、何かを。』「具体的には、何をするのさ。まだ、俺は疑い続けるぜ？」『花苳藎——この輸送機で仮設本部を攻撃して、残

りの装備を君たちに渡そうと思っている。安心してくれ、これでも運転に必要な「免許」を持っているんだ。』「・・・そうか。」『譽苳苳——急ぐぞ、このヘルメットは情報——

パディマティスは何の前触れもなく、引金を力を込めた。先程と同じように、至近距離で撃たれたパラモは脚から血を流した。同時に大声で痛みを吐き出して。対してパディマティスは冷静に、彼の

頭からヘルメットを奪い、それを遠くへ放り投げた。

「パディ！」 「気でも狂ったの!？」 「・・・そうかも、な。・・・奴の裏切りが他の兵士に

伝わるなら、しかも全員が非力と分かれば、我先に“ここ”へ駆け付けるだろう？ その時に“輸送機”でも使って反撃すれば、俺たちは確実に勝つ。少なくとも数は減らせられる。」

その言動から、彼の面が町長に近づいた、いや、同じものだと気付いた。誰より頭が切れている。全ての情報を基に最適解を見つける——これが、遺伝子なのだ。

「ただ——レアが言ってくれたように、焦りは禁物だな。」 「・・・変なんだ。・・・14年

前に、俺たちは争った。彼らが姿を晦ました後に“銃”を発見した、そう名付けた。なのに、——  
どうして“銃”という単語が翻訳できる？」 「!」

言われてみれば、彼らは私たちを——知りすぎている。いや、それが敵の実力とも言える。

「・・・そういう魔法じゃ？」 「違うな、銃も帽子も“機械”で作られている。魔法とは異なる

存在——だが、両者には“規則”がある。」 「奴は俺の思考を読み取れなかった。彼らの前では

“銃”など一言も発していない。しかし、正しく認識していた。・・・誰も、信用できない。」

フェドやパラモの真意は分からなかった。それは、この戦争が・・・単純ではないと教えている。

「・・・つまり？」 「結論は・・・ない。ただ、——最近の狂気よりも、変な感覚だ。」

TIP・・・台詞は意味を持ちますが、無言も意味を持っています。この小説は精度よりも興味に惹かれる内容が優先して描かれるため、抽象的な表現が多いと感じるかもしれません。しかし、物語とは多くの教訓や本質を教えてくれる存在であり、それは大勢に簡潔に伝わらなければ意味がありません。どうせ、時間と共に高度な情報は劣化します。この物語も、一人の友人が残した小さな物語に影響されたことで、描いているのですから。



目の前には、暗黒の空間が・・・古びた施設や建設中の廊下とは別の、異質な空間が広がっている。それは薄暗いというよりも——黒を貴重とした一本の道だった。

「・・・ここから先は一人で、お願いします。」 「・・・え？」 「そういう指示なのです。私

たちは「賢者」と対話できない掟なのです。」 「・・・尋問は？」 「何か心当たりでも？ 残念

ながら私たちは「賢者」の使者ですよ。」 「・・・こんな自分が、何故？」 「それは、彼らから

聞いてください。」 「・・・。」

不幸中の幸いか、彼らは秘密警察ではなかった。しかし・・・この時期に「賢者」が自分呼び出すのは、明らかに変だ。《MRG》の詳細などは仕様書や実物を見れば済む話である。・・・いや、今は考えるべきではない。たとえ《旧人類》の根絶やしを企む者々であろうと、ここまで導いてから肅清するとは考えにくい。——友好的であれば損害はなく、敵対的であれば自分が有利な「何か」を握っている。シンプルな条件だ。

二重の扉を通り抜ければ、遂に外界と隔離された。先程よりも視界は役立たず、その明暗ではなく雰囲気は恐怖を覚えながら、角に浮かぶ光を目安に歩き続ける。

・・・誰かに見られている、そんな感覚が恐怖の正体だと気付いた。赤外線カメラ？ 生物的な眼光？ とにかく、歩行が加速する。ストウが腰に挿した棒状の何かを手に取り、走り続けた。無造作に握ってみるが、どうやらボタンは存在しない。

次第に眠気が、感覚の麻痺が、そんな——意識が曖昧になったと気付いた、が、その刹那に視界が暗黒ではないことに気付いた。

06. 歴史を紡いだ遺産

「・・・何だ？・・・何が起きた？」

確かに、先程まで暗闇を歩いていた。しかし、そこ・・・ここは一面が・・・そうだ、地平線の先まで、浅い水面が地に張っている。その上には青空が、横雲が、それらを照らす——太陽が、視界全体に広がっている。・・・その光景に見惚れていたせいか、目の前に立つ少女へ気付いたのは最後だった。黄緑色の髪と瞳・・・左右非対称な瞳に、黒いワンピースを着た、裸足の少女が。

「・・・君は、誰？」 「うーん、説明しにくいね。・・・賢者といえは違うし、でも、そういう

立場だから・・・ね。」 「・・・じゃあ、この景色は、何？」

「好奇心旺盛で何より。貴方は現実世界から別の世界に意識が移ったの。大丈夫、死んだわけじゃないよ。」 「・・・ど、どうやって？ どうして？」

「そういう種類の気体や機械が存在するのよ。どうして失神させたかって？ これが手っ取り早い。対話とか、判断とか。」 「・・・そうなのか。」

この体験は、決して容易くはない——貴重なものだった。・・・だからこそ、疑いは深くなる。  
“これは高度な尋問ではないか”と。

「それじゃあ、本題を教えてよ。どうして僕を“連れて”きたのか。」 「そうね。・・・でも、

“今の貴方”に用事はないの。・・・“他の貴方”が教えてくれたから。」 「・・・え？」

「貴方の意識は、並行してホストされている。つまり、貴方は何度も“ここ”に訪れては私と対話している。」 「・・・そんな、それなら、その記憶は？」 「あら・・・鋭い質問。そうよ、現実

に帰ると“今の貴方”だけが、記憶を持ち帰ることができるの。幻想的な体験と、懐疑的な自分だけね。」 「・・・そうか。・・・それなら、私が敵か否か？ 別に、気にしなくていいの。現実

が答えを教えてくれるんだから。ここは“マトリックス”じゃないの。」

何故、いや、どうやって彼女は自分の質問を予想した？ 嗚呼、自分の意識を読み取っているの

か・・・違うッ、この解答は彼女が自分に“直接”書き込んでいる！ この思考は声として出力されている。貴方の素として。呪文で謎を解き明かすことも――

「止める！ 僕の思考を弄るな！」 「フッフ、可愛い性格ね。――私の友達として傍に置こう

かしら。どう？」 「・・・!？」

ふと、彼女の横には僕がいた。これも、彼女が造っている。そうだ、自分は既にデジタルなデータとして取り込まれている。だから――全ての辻褄が合っているのだ。

「帰してくれ！ 現実世界に！」 「本当に？ 他の貴方は、この景色を更に――」



「・・・ッ!?」

自分は、直前の自分を思い出した。・・・ここは、現実世界か?・・・嗚呼、そうだ、他の自分が彼女に、名も知らぬ賢者か誰かに尋問されていたのだ。・・・何もかもが——分らない。

ここは赤色の光に包まれた、異質な空間だった。八角形の天井から、視点を下げると——自分は仰向けで寝ていた。頭が“動かない”のは、謎の半球体が頭を覆っていたからだ。それは医学で使われる《抽象機器》か——おそらく、更に進んだ技術で作られている。

自由な手足でヘルメットから抜け出して、視覚よりも触覚を頼りにベッドから降りる。幾何学的な形をしたベッドだが——それは、地面から“生えて”いた。それ以外に、幾つか棒状の——地面に収納されていたであろう機材が姿を表している。・・・全てが赤色に染まっているが、おそらく全ては白色のオブジェクトだ。

自分は同じ白衣を着て・・・だが、ポケットの違和感が消えていた。自分の《情報端末》とストウから貰った棒・・・インカムまで盗られている。それらしい戸棚もないため、探す宛はない。——  
そもそも、扉が見当たらない。自分は何処から入った? ガスで眠ったらしい自分の身を、誰が運び入れた?

「おーいッ! 誰かーッ!」 「・・・。」

発した声は壁に反響するばかりであり、何かを期待するのは無駄だと予想する。・・・つまり自分は飢え死ぬまで・・・ここに閉じ込められて?

「ッ!・・・落ち着け、・・・落ち着こう。」

ひとまず、壁に仕掛けがないか隅々を調査する。戦場まで乗り込むには短い時間だが、命が尽きるには長い時間である。指に力を込めたり、IDを翳したり——2面、3面と次々に進むが、何れも何も見つからない。

「・・・現実が答えを教えてくれる・・・現実が・・・」

これは、意図して閉じ込められている？ いや、確か、彼女が喋った最中に“何か”が起きた。今の状況は・・・想定外だ。自分が異常な行動をしたわけでもない。それなら別に、自分に罪はない。

彼女は、何者だったのだろうか？ あれは賢者に似た・・・賢者全員の意識が融合した姿？ それとも賢者とは異なる人格？ 少なくとも別の世界・・・“仮想世界”とでも名付けようか、その世界を制御している言動だった。

他にも数多の訪問者が対話を行い、そして彼女を忘却したのだろう。だから誰も賢者の実態を知ることができなかった。おそらく、直前の自分も本来は“存在しない”はずだった。・・・そもそも賢者は5人なのか？ もはや、何の情報も信頼できない。

そんな《上級社員》が求めていた情報——自分は、別に《フォルタグルンドウ》と《ティロディアクボ》の真実を知ったぐらいだが・・・大した情報だな、嗚呼。ただ、それなら情報源のサイロを・・・ニーヴを尋問するべきでは？ 彼らよりも警戒心が薄いから？ 彼らこそが“真の敵”で、自分に駆け引きを？ 駄目だ、誰の情報も信頼できない。

虚無に感傷する最中、謎の機械音が空間に響き始めた。飛び出していた機材が次々と地面に戻り、自分が調べたはずの壁に穴が——扉が開く。ただ、照明は赤色を保ったまま。

「オクデイブ！ 行くぞ！」 「え・・・サイロ！？ 荷物が——」 「止む無しだ。時間がないぞ。」 「あ、ああ、分かった。」

原因も理由も分からない。しかし、状況が変わった今、信頼できるのは不気味な空間から逃がしてくるサイロだけであった。

2人は一直線に道を走る。104メートルはある道を——白色の通路を駆け抜ける。

「なあ！ どうなっている！？ どうして、走る！？」 「お前は、消されるはずだった！ 真実を隠す奴に狙われている！」 「・・・そうなのか。・・・そうだよな。」

彼の話を信じるならば、これは尋問ではなく葬儀だったらしい。情報を確認して、確実に粛清する・・・まさに、完璧な方法だろう。

「——どこへ！？」 「どこでもいい！ とにかく《廃線》へ行くぞ！」 「分かった。」

馴染みのある廊下へ戻れば速度を落として、彼は《情報端末》を片手に経路を辿る。賢者の使者は既に居らず、表示されないはずの《廃線》を把握しているサイロは・・・特別な存在なのだろう。

ここが軍事省だろうと構わず、彼のIDで扉が開く。それよりも彼が気にしているのは、全ての廊下に設置されている監視装置だった。区間は閉鎖されないため、今は機能していないらしいが。

「・・・話してもいいか？」 「俺も聞きたいことが山々だ。」 「サイロは、あの後に何を？」

「お前が何も言わずに消えたから、追跡したんだ。」 「嗚呼、ストゥが持ってきた装置は、それだったのか！」 「・・・いや、お前の《情報端末》だぞ？ ストゥが何だって？」 「え・・・突然、棒状の何かを渡されたけれど。サイロの指示じゃないのか？」 「あいつは何も知らない。畜生

が、状況は更に複雑か。」 「・・・僕は黙っておくよ。」

ストウの立場は？ 彼女が僕を通報した？ それとも第三の勢力？ いや、彼女こそがニーヴなのか？ —— 無駄な仮説だ。サイロが把握していなければ、信頼するべきではない。

筋肉を追求する軍人と擦れ違うことも少なくなり、ついに居住区域を通り抜けた。しかし・・・気は抜けない。人気の少ない廊下で良い噂は聞かない。稀に、立証不能な事件が起こるものだ。

「お前は、あんな場所で何をしていた？」 「そう、変な奴に連れて行かれてさ。何かと思えば賢

者に対話させられたよ。」 「・・・は？」 「賢者か分からないけれど、意識を仮想世界にコピー

されて、多分、他の自分が—— 「ちょっと黙れ。情報量が多すぎる。」 「ああ、ごめん。」

「つまり、お前は賢者に追われているのか？」 「うーん・・・少なくとも、味方っていう立場で

はなかった。」 「クソ・・・じゃあ、賢者が敵だよ。お前のIDが全て“消されている”んだから

な。」 「え・・・え？」 「話は後だ、行くぞ。」

気付くと、2人は工事中の廊下へ足を踏み入れていた。鉄柵を飛び越えて、サイロに続いて作業室の用具を拝借して、再び紆余曲折する道を進めば、そこには明かりも何もない虚空が—— 賢者の部屋よりも薄暗い廊下が続いていた。

「・・・これは、スケプトが逃げ出しそうな場所だな。」 「ハハッ・・・僕は既に克服したよ。

酸素が切れるのは、御免だけれど。」 「・・・行くぞ。」

マスクを被り、ランタンを垂らして、吸い込まれるように闇を進む。ここで何か問題が発生すれば、それは即ち死を意味する。子供時代には必ず“灯りがない場所へ行くな”と教えられる、そして《空

《間恐怖症》や《暗闇恐怖症》の大人が誕生する。・・・経験しなければ、恐怖は消えないというのに。前後は区別できなくなり、サイロの《情報端末》だけを頼りに難なく進む。最適化される以前に建設された分岐点、沈黙するエスカレーター、更に奥へ行けば——前世代の言語で書かれた看板も出現した。今日の言語よりも文字種が少ない代わりに、濁音が付属している。・・・歴史が正しければ、これが《フォルタグルンドウ》で話されていると、そんな思考を巡らせていけば、ついに《セーフ・エリア》へ辿り着いた。——ここは、災害時に利用できる頑丈な空間である。

『ここで、休む。』（了解。）

端末と手話で合図を取り、機械式の引戸に設置されたバルブを全力で回した。錆び付いた油圧の音が刻まれると、その隙間から空気が流れていく。内側のバルブを回せば音は静まり、傍の非常装置を作動させればレトロなランプが点滅を繰り返す。これは——化学的に酸素を補充しているようだ。

「——ふあ。・・・臭いな。」 「・・・久しぶりに、足が痺れたよ。」

粗い地面に腰を下ろすと、一斉に気が抜けた。緊張が解けた自分は様々な感情に刺激される。元の生活に戻れないという不安、後には退けないという焦燥、それはサイロも同じだった。

「・・・どうして、自分を助けてくれた？」 「そりゃ・・・オクディブが釣られると、俺も釣られるからな。これが『運命共同体』ってやつだ。」 「・・・ハハハ、ありがとう。」 「な、何が可笑しい？」 「何か、サイロの嘘は分かりやすいなあーって。」 「ハア!？」 「普段は冷静な

声色が、すぐに変わるんだもん。」 「・・・。」 「普段は冷静な

「・・・ここから、どうやって生きる？」 「安心しろ、何とか『亡霊の手配書』さえ取り消せば



自由に行動できる。俺は軍事省まで侵入した“ハッカー”だぞ？」 「・・・頼もしい。」

サイロが腰からガジェットを取り出す間、自分は今後について考えてみる。・・・むしろ、失うものがないからこそ、今こそ『フォルタグルンドウ』へ行けるのかもしれない。両親や妻子も居ない身で・・・兵器開発1課の保障は、饒舌なスケプトが何とかしてくれるだろう。

結局のところ、何が正しいのかは分からない。しかし、正義を放棄するのは正しくないと考え。既に僕たちは賢者と小さな戦争を起こしている。それが何の罪かは知り得ないが、死に値する情報を得なければ、その死に納得すらできないのだ。

「駄目か・・・ここは完全にオフラインだ。」 「・・・戻るしかないか。」 「それしかない、が・・・その前に、情報を整理する。」 「そうだね。」

自分は武器を持った使者に連行されたこと、ストウが意味深長な何かを渡したこと、そして、賢者と奇妙な形式で対話したことを伝えた。彼もまた、自分が“何も言わず”姿を消したこと、後にIDが抹消されたこと、しかし、その全貌が掴めないことを教えてくれた。それ故に、輸送船の正体や場所を調べることはできなかった。

「問題は、オクディブが賢者を敵に回した理由だな。」 「・・・『移住計画』の真相を、知ったから？」 「あの空間は盗聴できない。他に訳があるはずだ。」 「うーん、賢者の使者が言うには『MRG』の詳細を聞かためとか・・・。」 「もしかすると、結果的に前者が該当したのかもな。頭を覗かれて。」 「・・・なるほど。それなら、本来の目的は何だったのか？」 「賢者は全ての情報を閲覧できる否に・・・そもそも、賢者の実態が曖昧で嫌になる。ストウも、何が目的で夜中に

—— 「あぁッ！ “基礎技術”だ！・・・《MRG》に使われている、駆動原理が原因だ。」

「・・・俺の専門外だが、強力な磁力でエネルギーやら弾丸やらを発射するんだろ？」 「そう、電

磁気力は古典的な機構が要らないからね。でも、更に効率性と耐久性を高めるために——未知の原

理——ストウが書いた簡易論文を基に、設計しているんだ。」 「・・・そうか。《MRG》のレ

ポートに簡易論文“以上”の情報を書いたんだな。」 「・・・かも、ね。」

《MRG》のコンポーネントを設計したのは自分でも、そこに新しい理論を応用できること、その最適な仕様を教えたのはストウだった。彼女の話を基に仕様書も併せて作成したわけで・・・それが論文に“矛盾”したらしい。そもそも、電磁気力を利用する大型武器を企画したのも彼女だ。

ストウは常に、知らない“フリ”をする。それは理解が許されない天才の宿命なのか、例えば論文では“理解不能な現象が存在する”という結論で綴られている——が、本当は全て、知っているのだ。いや、自然理学を知りすぎている。それを共有しないのは、彼女が世間を恐れているのか、悪用を恐れているのか・・・おそらく、後者なのだろう。

基本的に、ストウは大凡の情報をオフラインの端末で纏めている。それ故、氷面下部に潜む情報は科学省も軍事省も、賢者すらも入手できないどころか、存在すらも知らない。それこそ、賢者の部屋に彼女の意識でも——

「・・・ストウの身が、危ない？」

「・・・。」

「ほら、自分が知らない高度な原理を彼女が教えてくれたのだから、その記憶が——」 「目的の手掛かりになると？・・・それは憶測の憶測

だぞ。賢者が求めていたのは『知識の共有』か『真実の隠蔽』だ。」 「目的が一つじゃない可能性

だってある。」 「お前も俺も、賢者に立ち向かえるほど万能じゃない。ストウシステイの立場が何であろうと、その前に自分の安全を確保しろ。欲張りは一匹も云々・・・そういう諺を知っている？」 「・・・」

どうにも、行動が纏まらない。何をすべきか分かっているはず、なのに――

戦う、何と？ 逃げる、何から？ ・・・そうだ、それを求めて《フォルタグルンドウ》へ行くのだ！ 危険なのは承知している。その決意を忘れてはならない・・・憶え続けなければ。

「今は、何も分らない。だから――知りたい、賢者やストウの目的をッ。・・・戦うかもしれない、逃げるかもしれない、それも――覚悟している。」 「・・・それが、お前の決意でいいんだな？」 「・・・初めから、そうだった。」

自分は、ただただ本当の歴史を知りたい・・・いや、第1調査隊に所属していた父と母の最期を、知りたいだけなのかもしれない。もはや、高尚な目的など関係なかった。

太陽の裏に隠れる2つの地球は、互いに沈黙する。本来は、そうあるべきなのかもしれない、が。



安置で多少の仮眠を摂った2人は、07時のアラームに、脳が溶けると噂のケミカルな音楽に叩き起こされる。備蓄されていた高濃度のレーションを平らげた後、準備を整えて《セーフ・エリア》に別れを告げる。ここから先には一切の保証がない。安全も権限も、酸素すらも。おそらく、サイロの

IDも消されている。

「いいか、まずは電波が届く距離で権限の復元を行う。そこから先は狩人が来ても『手違い』だと示せばいい。輸送船の場所を特定して、そのまま向かう。もしも《廃線》を抜ける前に狩人と会えば——それまでだ。」

「・・・工房まで近いのが幸いだね。・・・結局、サイロも《フォルタグルンドウ》へ行くの？」

「相手が悪すぎるからな。何度でも手配書は発行されて、何れは捕まる。それに・・・お前が一人じゃ輸送船も翻訳機も、何も用意できないだろう？」

「・・・ありがとう。本当に。」

昨日の助言を気にして声色を整えているが、やはり彼の嘘は分かりやすい。その瞳は、仮想世界に映った自分と同じ——恐怖と興味が入り混じっている。今の自分も、そうだ。

マスクとランタンを装備した2人は、力の入った拳でバルブを回す。それは昨日より軽くも、そう感じることはなかった。暗闇が怖いわけでも、狩人が怖いわけでもない、——敗北を恐れている。それが、何よりも未知だった。

昨日よりも遠回りで、果てには違う出口へ向かっている。《広域通信網》から一切の情報が手に入らないという不便、そして不安を改めて知った。【闇は静寂という平和を齎す一方、無常という恐怖を与える】とも言える。全ての情報が失せた環境に隠れると安心するが、安心できない。そういう矛盾こそが、闇の正体なのだ。

既に監視装置の記録から逃走経路が割り出されて、未完成の廊下、そして《廃線》を複数の狩人が徘徊している頃合だろう。目的は生け捕りか、そうでないかは分からない。

(武器を拾う。) (護衛は任せた。)

自分は床に落ちていた配管の一部を手に入れる。これで狩人が携帯する《単式経銃3号》に対抗できるとは思わないが、ないよりはマシだ。対物用の《統銃》よりは圧倒的に威力が低いうえに、上部の管を変形すれば使い物にならなくなる。この暗闇では暗視眼鏡を装着していると思うが、その場合は照準を合わせにくい。近距離であれば、対等に―― だッ だッ だッ だッ

「・・・！」

突如として、天井の照明が順々に点灯した。電気が復旧した、それは、つまり――

(隠れろ！) (駄目だ、引き返す！)

周囲を見渡すも、身を潜められるような空間や部屋は存在しない。息を潜める、すると道の先から微かな足音が、複数人の重装備が響き渡る。姿は見えない、しかし逃げれば足音で気付かれる。突き当りまで、そこまで音を殺して歩くには遅すぎる。どうする・・・どうすればいい！？

(・・・走れ！)

TIP・・・《ティロディアクボ》では母体が必要としない機械的な出産（人間の製造）が可能であり、人口を維持するために恒久的な運営が行われています。自然的な出産で誕生した人間を区別するような単語は存在せず、どちらにしても保育機関や教育機関といった施設単位で育ての親が存在するため、《新人類》は《フォルタグルンドウ》よりも多様な親子関係を、更に言えば国という家族に所属していると考えていました。ちなみに、オクディプの両親は血縁関係にあり、生前は家庭で生活していたそうです。

## Cosmic Repeat Proverbs #1

## Cosmic Repeat Proverbs #1

### Cosmic Repeat Proverbs #1

発行：2024.03.16

版番：0.3 (早期公開)

著者：JukeLife

如何なる表現を含む二次創作を許可